



Oracle® Business Intelligence Scheduler ガイド

リリース 10.1.3.2
2007 年 4 月

Oracle Business Intelligence Scheduler ガイド, リリース 10.1.3.2

部品番号 : E05030-01

原本名 : Oracle Business Intelligence Scheduler Guide, Version 10.1.3.2

原本部品番号 : B31768-01

Copyright © 2006, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性あります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

第 1 章： このリリースの新機能

第 2 章： Oracle BI Scheduler の概要

Oracle BI Scheduler とは 10

Oracle BI Scheduler での iBot のサポート 10

Oracle BI Scheduler でのデータベースのサポート 11

Oracle BI Scheduler のスキーマについて 12

Oracle BI Scheduler のログ・ファイルについて 12

第 3 章： Oracle BI Scheduler の Job Manager のメニュー

Scheduler のジョブのパラメータについて 14

Oracle BI Scheduler の Job Manager について 14

Oracle BI Scheduler の Job Manager のツールバー・メニュー 14

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「File」メニュー 15

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Service Management」メニュー 15

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Jobs」メニュー 16

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Instances」メニュー 16

Oracle BI Scheduler の Job Manager のインスタンスのプロパティ 17

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Configuration」ダイアログ・ボックス 18

Job Manager の Oracle BI Scheduler のタブ 19

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Mail」タブ 23

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「iBots」タブ 25

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Workflow」タブ 27

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Java Extension」タブ 27

Oracle BI Scheduler のジョブの一般的なプロパティ 28

Oracle BI Scheduler の Job Manager のジョブのアクション 30

Oracle BI Scheduler の Job Manager のジョブ・トリガー 31

第 4 章： Oracle BI Scheduler の Job Manager の構成

Windows での Oracle BI Scheduler の Job Manager の起動 36

Job Manager での Oracle BI Scheduler ジョブの追加 36

Job Manager での Oracle BI Scheduler ジョブの変更	37
Job Manager のデフォルト値のリストアまたは変更	37
Oracle BI Scheduler での iBot ジョブの変更	37
ジョブ・インスタンスの再実行	38
Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの管理	38
Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの表示とリフレッシュ	39
Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの取消し	39
Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの消去	40
他のアプリケーションのワークフロー・タスクのトリガー	41
Oracle BI Scheduler でのワークフロー・トリガーの構成	41
Oracle BI Scheduler ジョブのサード・パーティによるトリガー	42
第 5 章： Oracle BI Scheduler のジョブ・スクリプトの使用	
キャッシュ・クリアを実行するための Job Manager スクリプト	44
iBot の連鎖実行用スクリプト	46
Oracle BI Scheduler のカスタム・スクリプトのプロパティの構成	47
Oracle BI Delivers のカスタム・スクリプトのプロパティの構成	48
Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトの読取り専用プロパティ	49
Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトの読取り / 書込みプロパティ	50
Oracle BI Scheduler のスクリプト定義定数	51
Severity 定数	51
DayEnum 定数	52
DayOfWeekEnum 定数	52
JobFlagsEnum 定数	53
MonthEnum 定数	53
OccurrenceEnum 定数	54
Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント	55
CreateArray メソッド	56
DeregisterCancelCommand メソッド	57
GetConfigurationValue メソッド	57
GetTempFileName メソッド	58
LaunchProcess メソッド	58
RegisterCancelCommand メソッド	59
ScheduleJobDaily メソッド	59
ScheduleJobMonthlyDate メソッド	60
ScheduleJobMonthlyDOW メソッド	61
ScheduleJobNow メソッド	63

ScheduleJobOnce メソッド	63
ScheduleJobWeekly メソッド	64
OnError イベント	65

第 6 章： Oracle BI Scheduler の Java ジョブ・プロパティの構成

Oracle BI Scheduler の Java ジョブ	67
Oracle BI Scheduler の Java ジョブ・プロパティの構成	68
Oracle BI Delivers の Java ジョブ・プロパティの構成	68
Oracle BI Scheduler のカスタム Java プログラム・パッケージ	69
SchedulerJavaExtension インタフェース	70
SchedulerJobInfo インタフェース	70
SchedulerJobException クラス	72
Oracle BI Scheduler の Java 拡張例	73

索引

1

このリリースの新機能

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition は、これまで Siebel Systems 社の Siebel Business Analytics プラットフォームとして提供されていたコンポーネントで構成されており、その機能が大幅に向上しています。

『Oracle Business Intelligence Scheduler ガイド』は、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のドキュメント・セットの一部です。このガイドでは、Oracle BI Scheduler を、スクリプト・ジョブや Oracle Business Intelligence Delivers および iBot とともに使用方法について説明します。このガイドには、新しい内容と、これまで『Siebel Business Analytics Scheduler Guide』というタイトルのガイドに記載されていた内容が含まれています。

Oracle BI Infrastructure をインストール、使用またはアップグレードする場合は、その前に Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のリリース・ノートをお読みください。Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のリリース・ノートは次の場所にあります。

- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の CD-ROM
- Oracle Technology Network の Web サイト (http://www.oracle.com/technology/documentation/bi_ee.html)。Oracle Technology Network の無料アカウントを登録するには、<http://www.oracle.com/technology/about/index.html> にアクセスしてください。

『Oracle Business Intelligence Scheduler ガイド』の変更点

表 1 に、リリース 10.1.3.2 のソフトウェアをサポートするために、このリリースのドキュメントに記載されている変更点の一覧を示します。

表 1. 『Oracle Business Intelligence Scheduler ガイド』の変更点

章 / 項	説明
全体	すべての章および項で製品名が新しく変更されています。
第 3 章「Oracle BI Scheduler の Job Manager のメニュー」	Oracle BI Scheduler のすべての構成タスクがこの章に移動しました (Oracle Siebel Workflow アプリケーションに固有の構成情報については、そのアプリケーションのドキュメントを参照してください)。 Job Manager の新しいすべてのフィールドの説明が追加されました。
第 4 章「Oracle BI Scheduler の Job Manager の構成」	Job Manager のすべての構成タスクがこの章に移動しました。
第 5 章「Oracle BI Scheduler のジョブ・スクリプトの使用」	すべてのスクリプト・プロシージャとその情報がこの章に移動しました。
「Oracle BI Scheduler の Job Manager のインスタンスのプロパティ」(17 ページ)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「ErrorMessage」フィールドが「Message」に名前変更されました。 ■ 「Status」フィールドに新しいステータス「Warning」が追加されました。 ■ ジョブ・インスタンスのステータスの意味を示すリストが追加されました。
「ジョブ・インスタンスの再実行」(38 ページ)	ジョブ・インスタンスを再実行する手順の説明が追加されました。
「キャッシュ・クリアを実行するための Job Manager スクリプト」(44 ページ)	スクリプトが更新されました。
「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトの読み取り / 書き込みプロパティ」(50 ページ)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「ErrorMessage」フィールドが「Message」に名前変更されました。 ■ 新しいオブジェクト・プロパティ (Severity) が追加されました。
第 6 章「Oracle BI Scheduler の Java ジョブ・プロパティの構成」	この章には、Java のジョブ・プロパティに関するすべての内容が含まれています。この章のすべての内容が新しく追加されたものです。

2

Oracle BI Scheduler の概要

この章では、Oracle BI Scheduler の概要について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI Scheduler とは」 (10 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler での iBot のサポート」 (10 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler でのデータベースのサポート」 (11 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler のスキーマについて」 (12 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler のログ・ファイルについて」 (12 ページ)

Oracle BI Scheduler とは

Oracle BI Scheduler は、ジョブを管理およびスケジュールする拡張可能なアプリケーションおよびサーバーです。Oracle BI Scheduler は、次の 2 種類のジョブをサポートします。

■ スクリプト・ジョブ。

スクリプト・ジョブは、Oracle Business Intelligence Server Administration Tool の Job Manager 機能を使用して設定および発行されます。たとえば、スクリプト・ジョブを使用することで、Oracle BI Server の使用率の統計を定期的にバックエンド・データベースにロードできます。スクリプト・ジョブでは、Oracle BI Scheduler は Oracle BI Server と通信します。

Oracle BI Scheduler は、2 つの公開された Java インタフェースと 2 つのスクリプト言語をサポートします。

■ サポートされる Java インタフェースは、次のとおりです。

- SchedulerJavaExtension.java
- SchedulerJobInfo.java

■ サポートされるスクリプト言語は、次のとおりです。

- VBScript
- JScript

注意： iBot 用のスクリプトおよび Oracle BI Scheduler の Job Manager で定義されたスクリプトは、Windows プラットフォームでのみサポートされます。Java インタフェースはすべてのプラットフォームをサポートします。

■ iBot（非スクリプト・ジョブ）。

iBot は、レポートおよびアラートをエンド・ユーザーに配信します。iBot は、Oracle Business Intelligence Delivers を使用して実行することを目的に構成および発行されます。非スクリプト・ジョブでは、Oracle BI Scheduler は Oracle Business Intelligence Presentation Services と通信します。詳細は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

Oracle BI Scheduler での iBot のサポート

Oracle BI Delivers でユーザーが iBot を作成してスケジュールすると、Oracle BI Presentation Server は、優先順位、目的の受信者、コンテンツの配信先デバイスなど、iBot に関する情報を収集します。Oracle BI Presentation Server は、この情報とその他の特徴を 1 つのジョブにパッケージ化し、Oracle BI Scheduler にそのジョブの実行時間を通知します。

iBot ジョブでは Job Manager の使用は必須ではありませんが、Job Manager を使用することで、より詳細に iBot を構成できます。iBot ジョブを使用する場合は、まず Oracle BI Scheduler を構成する必要があります。詳細は、「[Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Configuration」ダイアログ・ボックス](#)」（18 ページ）を参照してください。

iBot の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』の「Oracle BI Delivers の使用」、または Oracle BI Delivers のオンライン・ヘルプを参照してください。

Oracle BI Scheduler でのデータベースのサポート

Oracle BI Scheduler では、単一の商用バックエンド・データベースを使用して、ジョブとそのインスタンスおよびパラメータに関する情報が格納されます。Oracle BI Scheduler は、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition でサポートされるすべてのデータベースで動作します。サポートされるデータベースの詳細は、『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』を参照してください。

Scheduler サービスは、バックエンド・データベースが次の条件を満たしている場合にのみ起動します。

バックエンド・データベースの要件	説明
Configured	バックエンド・データベースと Oracle BI Scheduler は 1 対 1 の関係にあります。複数の Scheduler アプリケーションを構成して単一のバックエンド・データベースを使用しないでください。
Operational	Oracle BI Scheduler でサポートされる特定のバックエンド・データベースの詳細は、『System Requirements and Supported Platforms for Oracle Business Intelligence Applications』を参照してください。
Mixed Authentication Mode	たとえば、データベースが SQL Server である場合は、ログインで SQL Server と Windows 認証の両方が許可されるようにセキュリティ・モードを設定する必要があります。 バックエンド・データベースへのログインにオペレーティング・システムの認証を使用しないでください。このようにすると、Scheduler サービスが起動しない場合があります。

Oracle BI Scheduler のスキーマについて

Oracle BI Scheduler に関連付けられたデータベース・スキーマは、ディレクトリ \$INSTALLDIR¥server¥Schema¥ にあります。このディレクトリには、主要な商用データベースで Oracle BI Scheduler のスキーマにテーブルを作成するための SQL スクリプトがいくつか存在します。

スキーマには、次の 4 つのテーブルがあります。

- S_NQ_JOB: スケジュール済のジョブに関する情報の格納に使用されます。
- S_NQ_INSTANCE: ジョブ・インスタンスに関する情報の格納に使用されます。
- S_NQ_JOB_PARAM: ジョブ・パラメータに関する情報の格納に使用されます。
- S_NQ_ERR_MSG: 正常に完了しなかったジョブ・インスタンスに関する情報の格納に使用されます。

Oracle BI Scheduler のスキーマ・テーブルの特徴は、次のとおりです。

- スキーマ・テーブルの内容は、実装方法によって異なります。これらのテーブルの作成方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。
- スキーマにはジョブ・スクリプトのパスとファイル名が格納されているため、複数のジョブで同一のスクリプトを使用している場合は、それらの更新が容易になります。
- Oracle BI Scheduler のテーブルは、Oracle Siebel Customer Relationship Management アプリケーションのトランザクション (OLTP) データベースに含まれます。Siebel CRM リリース 7.7 以降の実行可能なアプリケーションがある場合は、Oracle BI Scheduler のテーブルをインストールする必要はありません。

注意: 使用状況トラッキングでは、サーバーに対して発行された各論理クエリーの使用率の統計が収集されます。構成ファイル NQSCONFIG.INI で使用状況トラッキングが有効になっていると、Oracle BI Scheduler では S_NQ_ACCT テーブルも使用されます。構成ファイルは、\$INSTALLDIR¥server ¥config ディレクトリにインストールされます。このテーブルは、Oracle BI Scheduler から独立しています。使用状況トラッキングが有効になっていると、Oracle BI Server は使用状況トラッキングのデータ・ファイルを生成します。Oracle Business Intelligence のインストールではサンプルの JavaScript が提供されます。このサンプルは、使用状況トラッキング・ファイルから情報を抽出し、リレーショナル・データベース内のテーブルにロードします。S_NQ_ACCT テーブルには、アカウント・データに関するすべての情報が格納されます。使用状況トラッキングの詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

Oracle BI Scheduler のログ・ファイルについて

Oracle BI Scheduler は、起動および停止アクティビティに関する情報のログを NQScheduler.log ファイルに記録します。このファイルは、ディレクトリ \$INSTALLDIR¥server¥Log¥ にあります。エントリは、UTF-8 フォーマットで書き込まれます。

このファイルは、テキスト・エディタを使用して表示できます。判読可能なテキストを表示するには、ビューアを UTF-8 に設定してください。

3

Oracle BI Scheduler の Job Manager のメニュー

この章では、Business Intelligence Server Administration Tool の Job Manager の機能について説明します。これは、Job Manager から Scheduler を構成するプロセスの最初の部分です。

この章の内容は次のとおりです。

- 「Scheduler のジョブのパラメータについて」 (14 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler の Job Manager について」 (14 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler の Job Manager のツールバー・メニュー」 (14 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler の Job Manager のインスタンスのプロパティ」 (17 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Configuration」ダイアログ・ボックス」 (18 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler のジョブの一般的なプロパティ」 (28 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler の Job Manager のジョブのアクション」 (30 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler の Job Manager のジョブ・トリガー」 (31 ページ)

Scheduler のジョブのパラメータについて

Scheduler のジョブには次のパラメータがあります。

- プロパティ
- 実行するアクション
- 実行日時を決定する実行スケジュール

Oracle BI Scheduler の Job Manager について

Oracle BI Scheduler のジョブを追加、削除、変更または取消しを行うには、Job Manager を使用します。たとえば、次の作業を実行できます。

- 開始時間、開始日、実行間隔、および終了時間と終了日（オプション）に対するオプションの設定。
- 「Add Job」ダイアログ・ボックスおよび「Modify Job」ダイアログ・ボックスを使用したジョブの追加または変更。これらのダイアログ・ボックスには、次の 3 種類の情報が含まれています。
 - ジョブの一般的なプロパティ
 - 実行するアクションを指定できるスクリプト領域
 - ジョブのトリガーを指定できるトリガー領域

Oracle BI Scheduler の Job Manager の ツールバー・メニュー

Job Manager のツールバーには、次の項で説明する 4 つのメニューがあります。

- 「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「File」メニュー」（15 ページ）
- 「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Service Management」メニュー」（15 ページ）
- 「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Jobs」メニュー」（16 ページ）
- 「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Instances」メニュー」（16 ページ）

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「File」メニュー

「File」メニューのオプションの説明は、15 ページの表 2 のとおりです。

表 2. Job Manager の「File」メニューのオプション

コマンド	説明
Open Scheduler Connection	「Machine Name」ダイアログ・ボックスを開きます。ここで、Oracle BI Scheduler を実行するマシンの名前を指定します。Oracle BI Scheduler が Oracle BI Server Administration Tool と同じマシンにある場合は、「[loca]」と入力できます。
Close Scheduler Connection	Job Manager と Oracle BI Scheduler の接続を切断します。
Configuration Options	「Scheduler Configuration」ダイアログ・ボックスを開きます。ここで、Oracle BI Scheduler を実行するマシンの名前を指定します。「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックスが開き、構成オプションを設定できます。
Exit	Job Manager を停止して、Server Administration Tool に戻ります。Oracle BI Scheduler に接続した状態で Job Manager を停止した場合、その接続も切断されます。

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Service Management」メニュー

「Service Management」メニューのオプションの説明は、15 ページの表 3 のとおりです。

表 3. Job Manager の「Service Management」メニュー

コマンド	説明
Pause Scheduling	スケジュールが続行されるまで、すべてのジョブの実行を停止します。「Pause Scheduling」は、メンテナンスのために必要になることがあります。 Oracle BI Scheduler を停止したとき、「Pause Scheduling」を実行することが必要になる場合があります。この場合、「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックスの「Scheduler」タブで「Pause When Service Starts」オプションも設定しておかないと、Oracle BI Scheduler を再起動したときにスケジュールが続行されてしまいます。
Continue Scheduling	Oracle BI Scheduler の通常の実行を再開します。
Stop Service	Oracle BI Scheduler のサービスを停止します。

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Jobs」メニュー

「Jobs」メニューのオプションの説明は、16 ページの表 4 のとおりです。

表 4. Job Manager の「Jobs」メニュー

コマンド	説明
Add New Job	「Add New Job」ウィンドウを開きます。ここで、新しいジョブのプロパティを指定します。
Remove Job(s)	選択したジョブ（複数可）を、Oracle BI Scheduler から削除します。ジョブが削除されると、そのジョブのインスタンスもすべて削除されます。
Modify Job	「Modify Job」ウィンドウを開きます。ここで、既存のジョブのプロパティを変更できます。
View Job	「View Job」ウィンドウを開きます。ここで、ジョブのプロパティを表示できます。
Run Job(s) Now	選択したスケジュール済ジョブを即座に実行します。
Refresh Job List	右ペインの「Job List」に表示されるジョブ情報をリフレッシュします。

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Instances」メニュー

Oracle BI Scheduler のインスタンスとは、Oracle BI Scheduler のジョブの具体的な実行に関する情報を記録するレコードです。「Instances」メニューのオプションの説明は、16 ページの表 5 のとおりです。

表 5. Job Manager の「Instances」メニュー

コマンド	説明
Cancel Instance(s)	実行中のジョブを取り消します。正常に取り消されたジョブのステータスは、「Cancelled」と表示されます。
Purge Instance	「Purge Instance」ダイアログ・ボックスを開きます。ここで、インスタンスの削除方法を指定できます。インスタンスの削除は、「Job ID」、「User ID」および「Before a particular time」別に行うことができます。
View Instance	選択したインスタンスの情報を表示します。
Re-Run Job Instance(s) Now	ジョブ・インスタンスを再実行します。失敗した iBot ジョブを再実行したときに配信されるのは、その失敗したジョブのみです。
Refresh Instance List	「Job Instance View」ペインの「Instance List」に表示されるインスタンス情報をリフレッシュします。

Oracle BI Scheduler の Job Manager のインスタンスのプロパティ

Job Manager のインスタンスのプロパティの説明は、17 ページの表 6 のとおりです。

表 6. Job Manager のインスタンスのプロパティ

フィールド	説明	
JobID	このインスタンスに関連付けられているジョブの ID。	
InstanceID	ジョブのこの特定インスタンスの ID。	
Status	ジョブ・インスタンスの Status は、次のいずれかになります。	
	■ Running	これは、iBot ジョブでも Script ジョブでも同じです。インスタンスが実行中の場合、ステータスは「Running」です。
	■ Completed	iBot: iBot のすべての配信先デバイスに配信が成功した場合、iBot インスタンスは「Completed」に設定されます。
		スクリプト: これは、スクリプトの Severity プロパティに従って設定されます。50 ページの表 18 を参照してください。
	■ Failed	iBot: iBot のどの配信先デバイスにも正しく配信できなかった場合、iBot インスタンスは「Failed」に設定されます。
		スクリプト: これは、スクリプトの Severity プロパティに従って設定されます。50 ページの表 18 を参照してください。
	■ Warning	iBot: iBot の一部の配信先デバイスにしか正常に配信できなかった場合、iBot インスタンスは「Warning」に設定されます。
スクリプト: これは、スクリプトの Severity プロパティに従って設定されます。50 ページの表 18 を参照してください。		
■ Cancelled	Job Manager でインスタンスを取り消すと、ステータスは「Cancelled」に設定されます。	
■ Timed Out	ジョブに最大実行時間があり、インスタンスの実行時間がこれを超過した場合、インスタンスのステータスは「Timed Out」に設定されます。	
Begin Time	Scheduler がジョブ・インスタンスを開始した日時。	
End Time	ジョブの Scheduler がジョブ・インスタンスを完了した日時。	

表 6. Job Manager のインスタンスのプロパティ

フィールド	説明	
ExitCode	インスタンスの終了コード。このコードは、ジョブのタイプによって解釈が異なります。	
	■ iBot	インスタンスの「ExitCode」は、配信の成功回数に設定されます。このカウントはデバイスへの配信の成功回数に対応しています。また、iBot の各受信者に対して、デバイスが複数ある場合もあります。
	■ Script	インスタンスの「ExitCode」は、スクリプトの ExitCode プロパティに従って設定されます。 デフォルトは 0（ゼロ）です。50 ページの表 18 を参照してください。
Message	インスタンスのエラー情報、警告、またはインスタンスの実行に関する一般的なメッセージを含むテキスト・メッセージ。	

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Configuration」ダイアログ・ボックス

Windows プラットフォームでは、Oracle BI Scheduler の構成オプションは、Business Intelligence Server Administration Tool の機能である「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックスで設定します。「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックスにアクセスするには、「Windows での Oracle BI Scheduler の Job Manager の起動」(36 ページ) を参照してください。

注意： UNIX では、Oracle BI Scheduler の構成オプションは、コンソール・ベースのアプリケーション schconfig.exe を使用して設定します。schconfig.exe の構成オプションは、「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックスにあるものと同一です。

「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックスには、18 ページの表 7 に示す一連のタブがあります。

表 7. 「Job Manager Scheduler Configuration」ダイアログ・ボックスのタブ

タブ名	説明している項
Scheduler	「Job Manager の Oracle BI Scheduler のタブ」(19 ページ)
Mail	「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Mail」タブ」(23 ページ)
iBots	「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「iBots」タブ」(25 ページ)
Workflow	「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Workflow」タブ」(27 ページ)
Java Extension	「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Java Extension」タブ」(27 ページ)

Job Manager の Oracle BI Scheduler のタブ

Job Manager の「Scheduler」タブはさらに複数のタブに分割されています。その各タブで、Oracle BI Scheduler のバックエンド・データベースへのアクセス設定やバックエンド・データベースの構成を行ったり、Oracle BI Scheduler の一般的な動作を指定したり、セキュア・ソケットの指定および構成のクラスタ化を行います。Oracle BI Scheduler のタブのフィールドは、19 ページの表 8 で説明します。

表 8. Job Manager の「Scheduler」のタブとフィールド

タブ	フィールド	説明
Database —Connection Pool	Database Type	Oracle Scheduler のバックエンド・データベースのタイプ。タイプはドロップダウン・リストから選択します。
	Call Interface	データベースへの接続が行うコールのタイプ。ここでドロップダウン・リストから選択するコールによって、データソースへのアクセスに使用する Application Programmer Interface (API) が決定されます。リスト内のコール・インタフェースのタイプは、選択したデータベース・タイプによって異なります。
	Data Source Name	接続に使用するデータソースのデータソース名 (DSN) を指定します。DSN には、データ・ソースの有効なログオン情報が含まれている必要があります。この情報が無効な場合、データベースへのログオンは失敗します。たとえば、Oracle BI Scheduler のバックエンド・データベースの DSN が ORCL8_Scheduler の場合、このフィールドには「ORCL8_Scheduler」と入力します。
	User name	データソースへのログオンに Oracle BI Scheduler が使用するユーザー名。そのユーザー名には、バックエンド・データベースの読み取りおよび書き込み権限が必要です。また、完全修飾されたテーブル名 (たとえば、ORACLE.S_NQ_JOB) を必要とするデータベースのテーブル所有者と同一である必要があります。
	Password/Confirm Password	データソースへのログオンに使用するパスワード。セキュリティのため、このパスワードはレジストリで暗号化されています。
	Timeout (Minutes)	操作の完了後にデータソースへの接続を維持する時間を分単位で指定します。 この間、新規の操作は「Maximum Connections」で指定した数に達するまでこの接続が使用され、新しい接続は開かれませんが、接続リクエストが完了するたびに、この時間はリセットされます。 指定する値は 1 以上です。デフォルト値は 60 です。
	Maximum Connections	Oracle BI Scheduler が同時に開くことができるデータベース接続の最大数。指定する値は 1 以上です。この制限に達すると、接続可能になるまで接続リクエストは待機します。デフォルト値は 5 です。

表 8. Job Manager の「Scheduler」のタブとフィールド

タブ	フィールド	説明
Database —Database Tables	Jobs	S_NQ_JOB は、スケジュール済のジョブに関する情報の格納に使用するデータベース・テーブルです。 注意： データベース・テーブル名の変更の詳細は、『Oracle Business Intelligence Applications Installation and Configuration Guide』を参照してください。
	Instances	S_NQ_INSTANCE は、ジョブ・インスタンスに関する情報の格納に使用するデータベース・テーブルです。
	Parameters	S_NQ_JOB_PARAM は、ジョブ・パラメータに関する情報の格納に使用するデータベース・テーブルです。
	Messages	S_NQ_ERR_MSG は、正常に完了しなかったジョブ・インスタンスに関する情報の格納に使用するデータベース・テーブルです。
General	Scheduler Script Path	Oracle BI Scheduler によって作成されたジョブ・スクリプトが格納されるパスを指します。一般的に、このディレクトリ内のスクリプトは追加も削除も行いません。デフォルトでは、このフィールドは \$OracleBI¥Scripts¥Scheduler に設定されており、\$OracleBI は Oracle BI ソフトウェアがインストールされている場所です。
	Default Script Path	(iBot ではなく) ユーザーによって作成されたスクリプトが格納されるパス。 ジョブを追加または変更するときに「Script」フィールドにファイル名が入力されると、Oracle BI Scheduler は、指定したファイルがあるかどうか、このディレクトリの内容を調べます。ただし、「Script」フィールドでフルパスを指定している場合は、このディレクトリは調べません。デフォルトでは、このフィールドは \$OracleBI¥Scripts¥Common に設定されており、\$OracleBI は Oracle BI ソフトウェアがインストールされている場所です。
	Temporary File Path	Oracle BI Scheduler の実行中に一時ファイルが格納される場所を指定するパス。
	Bulk Fetch Buffer Size (bytes)	データベース・ゲートウェイで使用します。データソースからデータを取得する際のバルク・フェッチ・ページの最大サイズをバイト数で指定します。デフォルト値は 33,792 バイトです。
	Server Port Number	デフォルトは Scheduler のポート番号です。
	Purge Old instances after X days	古いジョブ・インスタンスをバックエンド・データベースから自動的に削除するまでの日数を指定します。古いジョブ・インスタンスが自動的に削除されないようにするには、この値を 0 (ゼロ) に設定します。 デフォルト値は、7 日後の削除です。

表 8. Job Manager の「Scheduler」のタブとフィールド

タブ	フィールド	説明
	Purge DB every X minutes	<p>Oracle BI Scheduler は、テーブルを更新し、影響を受ける行に削除フラグを設定します。</p> <p>注意: Oracle BI Scheduler は、ジョブまたはインスタンスが削除されたとき、実際には SQL DELETE 文を発行しません。</p> <p>SQL DELETE 文は、実際には X 分ごとに発行されます (X は、このフィールドの値として定義)。デフォルト値は 60 分ごとです。</p>
	Minimum Execution Threads	Oracle BI Scheduler のスレッド・プール内の複数スレッドの最小数を指定します。
	Maximum Execution Threads	Oracle BI Scheduler のスレッド・プール内の複数スレッドの最大数を指定します。
	Pause When Service Starts	Oracle BI Scheduler の起動時にジョブが実行されないように指定します。ユーザーは Oracle BI Scheduler の一時停止中に、ジョブを追加、変更または削除できます。ただし、ジョブは実行されません。通常どおり実行を続行するには、「Service Management」→「Continue Scheduling」を選択します。
	Administrator Name	<p>このフィールドに、管理者権限を持つユーザーを指定して、Oracle BI Scheduler および Oracle BI Presentation Services が、他のユーザーとして Oracle BI Server にログオンできるようにします。Oracle BI Scheduler は、ユーザーのために Oracle BI Server および Oracle BI Presentation Server でジョブを実行します。このとき、ユーザーのパスワードは格納しません。このユーザーには、リポジトリ管理者を指定する必要があります。リポジトリ管理者は、他のユーザーとしてログオンでき、(共有フォルダにアクセスするための) Presentation カタログへの基本的なアクセス権が設定されています。</p> <p>注意: 管理者の名前変更の詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストールおよび構成ガイド』または『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。</p>
	Administrator Password/Confirm Password	<p>他のユーザーとしてログオンする権限を持つ管理者のパスワード。このパスワードはレジストリで暗号化されています。これを変更するには、Job Manager (Windows) または schconfig.exe (UNIX) を使用します。</p> <p>注意: 管理者の名前変更の詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストールおよび構成ガイド』または『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。</p>

表 8. Job Manager の「Scheduler」のタブとフィールド

タブ	フィールド	説明
Advanced	Use Secure Socket Layer	デフォルトでは、このボックスは選択されていません。Scheduler で SSL (Secure Socket Layer) を有効にするには、このボックスを選択します。このボックスを選択したら、SSL 情報を入力する必要があります。 注意: この SSL フィールドによって、Scheduler が SSL を介して通信するように構成できます。これらのフィールドに入力する SSL 情報の設定および検索の詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。
	SSL Certificate File Path	
	SSL Certificate Private Key File	
	SSL File Containing Passphrase	
	SSL Require Client Certificate	
	SSL Certificate Verification Depth	
	CA Certificate Directory	
	CA Certificate File	
	SSL Trusted Peer DNs	
	SSL Cipher List	
Script Server Port	スクリプトと Scheduler のプロセス間の通信に使用するポート。このポートは、Scheduler が実行されているマシンからの接続しか受け付けません。デフォルトのポートは 9707 です。	
	Participant in Cluster	デフォルトでは、このボックスは選択されていません。Business Intelligence Server をクラスタに入れ、Cluster Controller Server からの接続が通知されるまで待機させるには、このボックスを選択します。このボックスを選択した場合、「Cluster Monitor Port」フィールドに値を指定することも必要になります。 注意: クラスタ化の詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。
	Cluster Monitor Port	Business Intelligence Server が Cluster Controller Server でリスニングするポート。デフォルトのポートは 9708 です。

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Mail」タブ

Job Manager の「Mail」タブはさらに複数のタブに分割されています。その各タブで、Oracle BI Scheduler の SMTP メール配信の構成を行ったり、セキュア・ソケットの指定および構成のクラスタ化を行えます。「Mail」タブのフィールドは、23 ページの表 9 で説明します。

表 9. Job Manager の「Mail」のタブとフィールド

タブ	フィールド	説明
General	From Display Name	「SMTP From」フィールドでは、送信者のアドレスのかわりとしてわかりやすいものを使用します。デフォルトは、Oracle BI Delivers <iBots@defaultmailserver.com> です。
	Sender Address	SMTP サーバーにある電子メール・アドレスで、Oracle BI Scheduler から送信されるすべてのメールに対して、送信者の返信アドレスとして使用されます。 初期値は defaultuser@defaultmailserver.com で、有効な電子メール・アドレスを反映するように変更する必要があります。 注意： 電子メールの受信者が返信しないように指示するには、このフィールドに「no_reply@mycompany.com」または「do_not_reply@mycompany.com」を追加することを検討してください。
	SMTP Server	メールを配信する SMTP サーバーの名前。初期値は defaultmailserver.com で、メールの配信に有効なサーバー名に変更する必要があります。 この詳細は、電子メール・クライアントの設定を参照してください。
	SMTP Port	該当するサーバーにある SMTP のポート番号。ほとんどのメール・サーバーは、メールのポートとしてポート 25 を使用しています。デフォルトはポート 25 です。
	Number of Retries Upon Failure	Oracle Delivers は、電子メールの配信に失敗すると再送信を試みます。「Number of Retries Upon Failure」では、再試行の回数を設定します。 デフォルトは 1 です。
	Maximum Recipients	メール・サーバーの限界を超えた数の受信者にメールを送信するのを防止します。メーリング・リストのサブスクライバの数が「Maximum Recipients」の値を超過すると、Oracle Delivers はリストを複数の小さなリストに分割し、各リストに電子メールを送信します。 デフォルトは 0 で、無制限を意味します。

表 9. Job Manager の「Mail」のタブとフィールド

タブ	フィールド	説明
General (続き)	Use Bcc Instead of To	「To」行ではなく「BCC」行にサブスクライバのリストを入力します。 サブスクライバにリスト上の他のサブスクライバの名前が知られたり、偶然（または悪意によって）リスト全体に返信することを防ぎます。 デフォルトでは、このボックスは選択されています（「はい」がチェックされています）。
	Authenticate against SMTP Server	SMTP サーバーがドメイン外のアドレスに電子メールを送信するには、認証が必要であることを指定します。 このフィールドを選択するときには、SMTP サーバー上の電子メール・ユーザーの「Username」フィールドと「Password」フィールドにも入力します。このフィールドが選択されていないときには、「Username」フィールドと「Password」フィールドは使用されません。
	Username	「Authenticate against SMTP Server」オプションを選択すると、「Username」には、指定した SMTP サーバー上の電子メール・ユーザーのユーザー名が指定されます。空白のままにすると、電子メール・サーバーは Oracle Delivers からの電子メールをいっさい認証しません。
	Email Password/Confirm Password	「Authenticate against SMTP Server」オプションを選択すると、これらのフィールドには、指定したユーザー名のユーザーのパスワードが指定されます。
Advanced	Use Secure Socket Layer	デフォルトでは、このボックスは選択されていません。メール送信で SSL (Secure Socket Layer) を有効にするには、このボックスを選択します。このボックスを選択したら、SSL 情報を入力する必要があります。 注意: この SSL フィールドによって、SMTP メール・サーバーが SSL を介して通信するように構成できます。これらのフィールドに入力する SSL 情報の設定および検索の詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。
	CA Certificate Directory	
	CA Certificate File	
	SSL Certificate Verification Depth	
	SSL Cipher List	

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「iBots」タブ

Oracle iBot は、機能的には Oracle BI Presentation Services および Oracle BI Scheduler に格納されたデータの組合せです。Job Manager の「iBots」タブのフィールドには、特定の Oracle BI Scheduler で実行されるすべての iBot の動作を記述します。「iBots」タブの各フィールドは、[25 ページの表 10](#) で説明します。

これらのフィールドの値を変更した場合は、「[Job Manager のデフォルト値のリストアまたは変更](#)」(37 ページ)の手順に示すように、デフォルト値をリストアできます。

表 10. Oracle BI Scheduler の Job Manager の「iBots」タブの構成フィールド

フィールド	説明
OBI Presentation Server	Oracle BI Presentation Services を実行するマシン名およびポート。サーバー名を指定する必要があります。また、サーバー名の後にコロンおよびポート番号を追加することもできます。ポート番号を指定しない場合、Oracle BI Scheduler は、Web サーバーのデフォルトのポート番号 9710 を使用します。たとえば、Web サーバーが machine1 およびポート 8900 で実行されている場合、このフィールドの値は machine1:8900 になります。クラスタ化された SAW サーバーを使用している場合、マシン名はカンマ区切りリストとして指定します。たとえば、localhost:9710, saw1:9710, oracleBI:9710 です。
Log Directory	例外的なエラーが発生した場合、iBot にログ・ファイルを作成させることができます。iBot の「Log Directory」では、これらのファイルが保存されるディレクトリを指定します。このディレクトリは、Oracle BI Scheduler サーバーからアクセス可能であることが必要です。Windows では、デフォルトのインストールがシステム・アカウントとしてサービスを実行するため、Oracle BI Scheduler がネットワーク・ディレクトリから書き込みまたは読み取りを行うことはできないようになっています。ネットワーク上の共有先にスクリプト・ファイルを保存したり、スクリプトがネットワーク上の共有先にアクセスする場合は、Oracle BI Scheduler をネットワーク・ユーザーとして実行する必要があります。
Purge files older than (days)	古い iBot ログを自動的に削除するまでの日数を指定します。古いログが自動的に削除されないようにするには、この値を 0 (ゼロ) に設定します。デフォルト値は、7 日後の削除です。
Number of Global Tries	ログオンしているユーザー数が多すぎる場合、Web サーバーまたはメール・サーバーが、Oracle BI Scheduler からの接続を含めて、新規の接続を拒否する場合があります。このようなオーバーロードに対応するため、iBot は接続を再試行します。このフィールドでは、配信対象および配信先に関するグローバル情報を取得するために、iBot が断念するまでの最大試行回数を設定します。
Minimum Global Sleep Seconds	接続が拒否されてから、配信対象および配信先に関するグローバル情報を取得するための再接続を試行するまで、iBot がランダムにスリープする最小秒数。
Maximum Global Sleep Seconds	接続が拒否されてから、配信対象および配信先に関するグローバル情報を取得するための再接続を試行するまで、iBot がランダムにスリープする最大秒数。

表 10. Oracle BI Scheduler の Job Manager の「iBots」タブの構成フィールド

フィールド	説明
Number of Request Tries	iBot は、グローバル情報を受信したら、サーバーに対して、各ユーザーに関する一連の固有のリクエストを発行します。これらのリクエストを発行するために Oracle BI Scheduler がサーバーに接続を試行する回数を指定します。
Minimum Request Sleep Seconds	接続が拒否されてから、リクエストを発行するためサーバーに再接続を試行するまで、iBot がランダムにスリープする最小秒数。
Maximum Request Sleep Seconds	接続が拒否されてから、リクエストを発行するためサーバーに再接続を試行するまで、iBot がランダムにスリープする最大秒数。
Number of Delivery Tries	iBot は、一意のリクエストの実行後、指定したデバイスに結果を配信しようとします。この結果を配信するために Oracle BI Scheduler がサーバーに接続を試行する回数を指定します。
Minimum Delivery Sleep Seconds	接続が拒否されてから、結果を配信するためサーバーに再接続を試行するまで、iBot がランダムにスリープする最小秒数。
Maximum Delivery Sleep Seconds	接続が拒否されてから、結果を配信するためサーバーに再接続を試行するまで、iBot がランダムにスリープする最大秒数。
Max Rows Times Columns	複数の iBot が連鎖実行されているとき、この値が iBot 間で渡されるフィルタのサイズを決定します。連鎖内の別の iBot にフィルタを渡すと、Oracle BI Scheduler は、パーソナライズされた受信者ごとの Conditional Report 用に、結果セットの結合を作成します。場合によっては、このレポートは非常に大きくなる可能性があります（1 つのレポートに一意の行が 100 あり、それぞれが 10 列で、ユーザーの数が 1000 の場合、このフィルタの値は 1,000,000 列になります）。Oracle BI Server ではこのような巨大なフィルタを扱えない場合があるため、このフィールドで、フィルタの行 * 列の最大数を指定します。デフォルトは 10,000 です。
Debug Enabled	Oracle BI Scheduler に iBot ごとにログ・ファイルを生成させるには、これを選択します。このログ・ファイルには、問題の診断に役立つロギング・メッセージが含まれています。このログ・ファイルは \$OracleBI¥server¥Log¥iBots に格納されます（\$OracleBI は Oracle BI ソフトウェアがインストールされている場所）。
Keep Error Log Files	iBot ごとにエラー・ログ・ファイルを生成するには、このチェック・ボックスを選択します。このログ・ファイルは、iBot の実行時にエラーが発生したときのみ生成され、エラー・メッセージのみが含まれます。このファイルは \$OracleBI¥server¥Log¥iBots に格納されます（\$OracleBI は Oracle BI ソフトウェアがインストールされている場所）。

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Workflow」タブ

この項は、「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Configuration」ダイアログ・ボックス」の一部です。

Oracle Business Intelligence Delivers は、Oracle Siebel Customer Relationship Management のバージョン 7.7 以上のアプリケーション・ワークフローをトリガーできます。

注意：このトリガーが発生する前は、『Siebel System Administration Guide』のコンポーネントのアクティブ化の手順に従って、Siebel Enterprise Server のコンポーネント・グループ EAI および Workflow をアクティブ化する必要があります。

運用アプリケーション・ワークフローの設定の詳細は、第 4 章「Oracle BI Scheduler の Job Manager の構成」を参照してください。

ワークフローをトリガーするプロセスの一部では、Job Manager の「Workflow」タブのコントロールを使用する必要があります。「Workflow」タブの各フィールドは、27 ページの表 11 で説明します。

表 11. Job Manager の「Workflow」タブの構成フィールド

フィールド	説明
Server	ワークフローを含む Enterprise Server の名前。Oracle BI Scheduler は、ワークフローをトリガーするために、サーバーの HTTP コネクタを使用します。たとえば、http://localhost です。
System	環境内のアプリケーションのシステム名。たとえば、iae_enu です。
Service	システム構成ファイルに定義されている HTTP サービスの名前。たとえば、ANALYTICS です。
User	Enterprise Server へのログオンに Oracle BI Scheduler が使用するユーザー名。
Workflow Password/ Confirm Password	ユーザー・アカウントのパスワード。

Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Java Extension」タブ

この項は、「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Configuration」ダイアログ・ボックス」の一部です。

Java Extension 機能を使用すると、エンド・ユーザーが、既存の Java Host プロセスで実行される Java インタフェースを使用して、カスタム・アクションを指定できます。クエリーの結果が Java プログラムに渡され、出力用にフォーマットされて、iBot の実行エンジンに返されます。カスタム Java プログラムは、iBot の条件が満たされたときと、レコードが返されなかったときの両方に指定できます。エンド・ユーザーは、この機能によって、サポートされているすべてのプラットフォームに対して、プラットフォームに依存しない言語でカスタム・アクションを開発できます。カスタム Java プログラムを iBot にアタッチする方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Oracle BI Scheduler は、Java Host インスタンスが実行されているホストやリスニングしているポートなど、Java Host インスタンスの一部のプロパティを認識するように構成する必要があります。「Java Extension」タブのフィールドは、「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Java Extension」タブの構成フィールド」(28 ページ) で説明します。

表 12. Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Java Extension」タブの構成フィールド

フィールド	説明
Java Host Servers	<p>デフォルトのサーバーは localhost で、デフォルトのローカル・ホストのポートは 9810 です。</p> <p>サーバーおよびポートは複数指定できます。Java Host のカンマ区切りリストは、次のフォーマットで入力します。</p> <pre>hostname:port[,hostname:port]</pre> <p>注意: Oracle BI Scheduler が SSL を使用するように構成されている場合は、Java ジョブも SSL を使用します。</p>

Oracle BI Scheduler のジョブの一般的なプロパティ

「Add Job」ダイアログ・ボックスまたは「Modify Job」ダイアログ・ボックスで、フィールドを使用して、ジョブの一般的なプロパティを構成または変更します。ジョブの一般的なプロパティは、28 ページの表 13 で説明します。

また、ジョブのアクションのプロパティは 30 ページの表 14、反復ジョブ・トリガーは 32 ページの表 15 で説明します。

表 13. Oracle BI Scheduler のジョブの一般的なプロパティ

フィールド	説明
Name	ジョブを説明する短い名前。このフィールドは、「Job Manager」ウィンドウの右ペインに表示される「Job List」にも表示されます。
Description	ジョブの簡潔な説明で、エンド・ユーザーに対するアクションを説明します。このフィールドは、「Job Manager」ウィンドウの右ペインに表示される「Job List」にも表示されます。
UserID	すべてのジョブに必須です。Oracle BI Server または Oracle BI Presentation Services と通信するジョブの場合は、「UserID」で、Oracle Business Intelligence の有効なユーザー ID を設定する必要があります。このフィールドは、「Job Manager」ウィンドウの右ペインに表示される「Job List」にも表示されます。 このジョブを実行するとき、Oracle BI Scheduler は、このフィールドで指定したユーザー ID の代理としてそのジョブを実行します。

表 13. Oracle BI Scheduler のジョブの一般的なプロパティ

フィールド	説明
Maximum Run Time MS	強制的に取り消されるまでこのジョブを実行する最大ミリ秒を指定します。その実行時間を超過したジョブは失敗し、タイムアウトの理由コードが表示されます。 ジョブがタイムアウトしないようにするには、このフィールドを 0（ゼロ）に設定します。 注意：1 秒は 1,000 ミリ秒と同じです。
Last Run Time	表示のみのフィールドで、このジョブが最後に実行を開始した時間を示します。このフィールドは、「Job Manager」ウィンドウの右ペインに表示される「Job List」にも表示されます。
Next Run Time	反復ジョブを示す表示のみのフィールドで、このジョブを次回実行する時間を示します。トリガーは、この値を決定するために使用されます。
Running Instance Count	表示のみのフィールドで、このジョブの現在実行中のインスタンスの数を示します。
Delete Job When Done	このオプションを選択すると、Oracle BI Scheduler のトリガーで定義されているスケジュール済の最後の実行後に、ジョブを削除します。次回の実行がない場合、ジョブは完了です。ジョブが削除されると、インスタンスもすべて削除されます。ジョブは Job Manager で手動で削除できるため、ほとんどのジョブでは、このオプションは選択しないでください。
Disabled	このオプションを選択した場合、トリガーの期限が切れるとジョブ・スクリプトが実行されなくなります。ただし、トリガーの設定に従って、次回の実行時間は更新されます。Oracle BI 管理者が、情報をまったく失わずに迅速にジョブを無効にできるため、「Disabled」は、新しいジョブのテストまたはデバッグに役立ちます。
Execute When Missed	（すべてのスケジュールが一時停止しているか、Scheduler アプリケーションが停止しているかのいずれかで）Oracle BI Scheduler の停止中にこのオプションを選択し、ジョブの次回実行がされなかった場合は、Oracle BI Scheduler の回復後にジョブが実行されます。このオプションを選択しなかった場合は、トリガーの定義に従って、次回実行時にジョブは実行されます。
Delete Script When Job is Removed	このオプションを選択した場合、ジョブが削除されると、関連付けられているジョブ・スクリプトも削除されます。多くのジョブが同じジョブ・スクリプトを参照している場合は、このオプションは設定しないでください。

Oracle BI Scheduler の Job Manager のジョブのアクション

「Add Job」ダイアログ・ボックスおよび「Modify Job」ダイアログ・ボックスにあるジョブのアクションのプロパティは、30 ページの表 14 で説明します。「Add Job」ダイアログ・ボックスおよび「Modify Job」ダイアログ・ボックスの「Script」領域のフィールドを使用して、ジョブが実行するアクションを定義します。

表 14. Job Manager のジョブのアクションのフィールド

フィールド	説明
Script Type	Oracle BI Scheduler は、VBScript、JScript、Java および NQCmd をサポートします。このフィールドは、「Script」フィールドで参照されているスクリプトのタイプに従って設定します。表示されるフィールドは、指定するスクリプトのタイプによって異なります。
Script Contains File Name	(VBScript と JScript のみ) Job Manager では、「Script」フィールドには、ファイル名、またはスクリプトの実際の内容のいずれかを入力できます。このオプションは、「Script」フィールドにファイル名が入っている場合にクリックします。
Script	(VBScript と JScript のみ) この値は、ジョブのスクリプト・ファイルへの参照、またはジョブ・スクリプト自体の内容のいずれかです。参照の場合は、TestConnect.js などのファイル名をこのフィールドに入力します。パスが指定されていない場合は、Oracle BI Scheduler は、「Job Manager Configuration」ダイアログの「Scheduler」タブの「Default Script Path」の構成値で参照されるディレクトリを調べます。パスが指定されている場合、このパスは、Oracle BI Scheduler アプリケーションからアクセス可能であることが必要です。
Parameters	(VBScript、JScript および Java のみ) フィールドの値は、パラメータの配列によりジョブ・スクリプトに渡されます。1 行には 1 つのパラメータのみを入力します。次に例を示します。 <pre>c:¥oracleBI¥data¥scheduler cli_snowflake SELECT Lastname FROM Employee</pre>
Class Name	(Java のみ) Java プログラムのアクションの完全修飾された実装クラス。
Class Path (jar file)	(Java のみ) Java プログラムが記述された JAR ファイルの名前。
Additional Class Path(s)	(Java のみ) Java プログラムの正常な実行に必要なユーティリティ・クラスやライブラリが記述された、その他の JAR ファイル。これらは、カンマで区切られた JAR ファイルです。
DSN (Data Source Name)	(NQCmd のみ) OBIS への接続に OBISch が使用するデータソース名。 注意: 偽装は、NQCmd とともに使用されます。「User ID」の値は、OBIS への接続時に OBISch が偽装を試みるユーザーです。

表 14. Job Manager のジョブのアクションのフィールド

フィールド	説明
SQL Input File	(NQCmd のみ) NQCmd が実行する SQL ファイルへの完全修飾されたパス。フルパスを入力するか、「...」ボタンをクリックして、ファイルの場所を参照します。このフィールドは通常、集計を永続的に維持する機能によって生成されたファイルに使用されます。
Additional Command Line Parameters	(NQCmd のみ) NQCmd に渡されるパラメータ。1 行には 1 つのパラメータのみを入力します。次に例を示します。 -o D:¥foo¥bar.txt

Oracle BI Scheduler の Job Manager の ジョブ・トリガー

この項は、「Oracle BI Scheduler のジョブの一般的なプロパティ」の一部です。

ジョブ・トリガーによって、ジョブの実行時間および頻度が決定されます。「Add Job」ダイアログ・ボックスおよび「Modify Job」ダイアログ・ボックスの「Trigger」領域のフィールドを使用して、ジョブが実行するアクションを定義します。

Oracle BI Scheduler のジョブ・トリガーには、単発トリガーと反復トリガーの 2 種類があります。

単発トリガー

「Trigger Type」ドロップダウン・リストを使用して、トリガー・タイプを選択します。単発トリガーは、アクションを一度しか実行しません。単発トリガーには、次の 2 種類があります。

- **Run Now:** このトリガーは、ジョブを即座に実行するように指定します。実行回数は一度だけです。
- **Run Once:** 「Run Once」を選択すると、「Begin Date」フィールドと「Start Time」フィールドがアクティブになり、そこで指定した日時に、このトリガー・タイプのジョブが実行されます。指定された時間が過去のものである場合、エラーが発生します。「Set Start Time To Now」オプションを選択した場合、このトリガーは、「Run Now」トリガーと等価です。

反復トリガー

すべての反復トリガーは、一定の期間に所定の間隔でジョブが実行されるように指定します。

反復トリガーで使用されるフィールドは、[32 ページの表 15](#) で説明します。

反復トリガーのタイプは、[33 ページの表 16](#) で説明します。

表 15. Job Manager の反復トリガーのフィールド

フィールド	説明
Begin Date	最初の反復間隔が実行される日を指定します。反復間隔は、「Start Time」と「End Time」の間の時間として定義します。「Set Start Time to Now」オプションを選択した場合、このフィールドは非表示になります。
End Date	最後の反復間隔が実行される日を指定します。「Has End Date」オプションを設定するとアクティブになります。「End Date」を設定しないと、ジョブは無限に実行されます。
Start Time	反復間隔の下限を指定します。ジョブが1日で最初に実行されるのは、この値に指定された時刻です。
End Time	反復間隔の上限を指定します。ジョブが所定の日で最後に実行されるのは、この値に指定された時刻またはその前です。この値が「Start Time」の値より前の場合、間隔はその日の夜中にまたがります。たとえば、「Start Time」が 11:00 P.M. で「End Time」が 2:00 A.M. に指定されたトリガーでは、「Begin Date」に指定された日の 11:00 P.M. に実行が開始され、翌日の 2:00 A.M. まで続行されます。
Has End Date	このオプションを選択した場合は「End Date」を指定します。このオプションを選択しない場合は、ジョブはスケジュールどおりとなります。 注意： スケジュールは永続的ですが、ジョブ・インスタンスは違います。Oracle BI Scheduler を再起動した場合、次回の実行時はジョブ・スケジュールに定めたとおりに設定されます。Oracle BI Scheduler を停止したときに実行中だったインスタンスは取り消されます。
Set Start Time To Now	このオプションを選択した場合、「Begin Date」フィールドと「Start Time」フィールドは無視され、その値には、Oracle BI Scheduler の現在の日時が移入されます。
Interval in Minutes	反復間隔内でのジョブの実行間隔を分単位で指定します。ジョブは「Start Time」に即座に実行が開始され、このフィールドの値である n 分ごとに再実行されます。
Maximum Concurrent Instances	(「Minutes」フィールドの値である) n 分ごとにジョブが実行される場合、実行時間の長いジョブは実行が重複することがあります。同時に実行されるインスタンスの数を設定するには、このフィールドを使用します。同時に実行されるインスタンスの数を制限しない場合は、この値をゼロに設定します。

反復トリガーのタイプ

「Trigger Type」ドロップダウン・リストから選択できる反復トリガーのタイプは、33 ページの表 16 で説明します。ここで説明しているフィールドは、すべての反復トリガーに関係しています。選択するトリガー・タイプによっては、ほかにもアクティブになるオプションがあります。表に示した例では、これらの追加オプションの使用方法を説明しています。

表 16. Job Manager の反復トリガーのタイプ

トリガーのタイプ	説明と例
Daily	<p>毎日または数日おきにジョブを実行します。「Days Interval」フィールドで、各反復間隔の間の日数を指定します。</p> <p>次に例を示します。</p> <p>開始日を 2010 年 1 月 1 日、終了日を 2010 年 1 月 15 日として、8:00 A.M. から 5:00 P.M. の間で 1 時間ごとにジョブを実行するには、「Begin Date」を「1/1/10」に、「Start Time」を「8:00 A.M.」に、「End Time」を「5:00 P.M.」に設定します。「Has End Date」フラグを設定し、「End Date」を「1/15/10」に、「Interval in Minutes」を「60」に、「Days Interval」を「1」に設定します。</p> <p>5 分ごとに永久的にジョブを実行するには、「Begin Date」を目的の日付に、「Start Time」を「12:00 P.M.」に、「End Time」を「11:59 A.M.」に、「Interval in Minutes」を「5」に、「Days Interval」を「1」に設定します。</p>
Weekly	<p>指定した曜日にジョブを実行します。「Weeks Interval」で、各実行間の週数を指定します。「Days of the Week」フィールドで、実行が発生する曜日を指定します。</p> <p>次に例を示します。</p> <p>月曜、水曜、金曜の正午に隔週でジョブを実行するには、「Begin Date」を目的の日付に、「Start Time」と「End Time」を「12:00 P.M.」に、「Interval In Minutes」を「1」に、「Weeks Interval」を「2」に、「Days of the Week」を「Monday」、「Wednesday」、「Friday」に設定します。</p>
Monthly by Date	<p>月の特定の日にジョブを実行します。「Months」フィールドで、このジョブを実行する月を指定します。「Days」フィールドで、その月の日を指定します。所定の月にその日がない場合、その日は無視されます。</p> <p>次に例を示します。</p> <p>1 月、2 月、3 月の 1 日と 15 日の 5:00 P.M. にジョブを実行するには、「Begin Date」を「January 1」に、「Start Time」と「End Time」を「5:00 P.M.」に、「Interval In Minutes」を「1」に、「Months」を「January」、「February」、「March」に、「Days」を「1」と「15」に設定します。</p> <p>うるう年（2 月 29 日）の 2:00 A.M. にジョブを実行するには、「Begin Date」を「January 1」に、「Start Time」と「End Time」を「2:00 A.M.」に、「Interval In Minutes」を「1」に、「Months」を「February」に、「Days」を「29」に設定します。</p>

表 16. Job Manager の反復トリガーのタイプ

トリガーのタイプ	説明と例
Monthly by DOW (DOW は Day of Week の略)	<p>所定の月の指定した曜日に、特定の間隔でジョブを実行します。「Months」フィールドで、このジョブを実行する月を指定します。「Days of the Week」フィールドで、それらの月のうち、ジョブを実行する曜日を指定します。「Occurrence」フィールドで、実行する曜日のいずれかを指定します。「Occurrence」フィールドでは、「First」、「Second」、「Third」、「Fourth」、「Last」のいずれかを指定できます。「Last」の値は、その月にその曜日が 4 回あるか 5 回あるかに応じて、4 回目と 5 回目のいずれかを指定します。</p> <p>次に例を示します。</p> <p>12 月の第 1 金曜日および第 3 金曜日の 4:00 A.M. から 8:00 P.M. の間で、1 時間ごとにジョブを実行するには、「Begin Date」を目的の日付に、「Start Time」を「4:00 A.M.」に、「End Time」を「8:00 P.M.」に、「Interval in Minutes」を「60」に、「Months」を「December」に、「Days of the Week」を「Friday」に、「Occurrence」を「First」と「Third」に設定します。</p> <p>サマータイムから標準時に切り替わるたびに、3:00 A.M. にジョブを実行するには、「Begin Date」を目的の日付に、「Start Time」と「End Time」を「3:00 A.M.」に、「Months」を「October」に、「Days of the Week」を「Sunday」に「Occurrence」を「Last」に設定します。</p>

4

Oracle BI Scheduler の Job Manager の構成

この章では、Oracle BI Server Administration Tool の Job Manager 機能を使用して Oracle BI Scheduler を構成する方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 「Windows での Oracle BI Scheduler の Job Manager の起動」 (36 ページ)
- 「Job Manager での Oracle BI Scheduler ジョブの追加」 (36 ページ)
- 「Job Manager での Oracle BI Scheduler ジョブの変更」 (37 ページ)
- 「Job Manager のデフォルト値のリストアまたは変更」 (37 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler での iBot ジョブの変更」 (37 ページ)
- 「ジョブ・インスタンスの再実行」 (38 ページ)
- 「他のアプリケーションのワークフロー・タスクのトリガー」 (41 ページ)

iBot ジョブの追加について

Oracle BI Server は、iBot を Oracle BI Scheduler に渡します。Job Manager を使用して iBot ジョブを追加することはできません。iBot ジョブは、ほとんどの場合、Oracle BI Delivers を介して追加されます。

ただし、「Modify Job」ダイアログ・ボックスを使用して iBot を変更できます。詳細は、「[Oracle BI Scheduler での iBot ジョブの変更](#)」 (37 ページ) および『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

Windows での Oracle BI Scheduler の Job Manager の起動

Job Manager は、Oracle BI Scheduler へのインタフェースです。Job Manager が起動すると、BI 管理者は Job Manager を使用して、Oracle BI Scheduler への接続、Oracle BI Scheduler の構成、起動および停止、ジョブの追加と管理、およびジョブ・インスタンスの管理を実行できます。

Oracle BI Server Administration Tool から「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックスを開くには、次の手順を実行します。

Windows で「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックスを開くには

- 1 Oracle BI Server Administration Tool を起動します。
- 2 ツールバーから「Manage」→「Jobs」を選択します。
- 3 「Job Manager」ウィンドウで、「File」→「Configuration Options」を選択します。
- 4 「Machine Name」ダイアログ・ボックスで、Oracle BI Scheduler が配置されているマシンの名前を入力し、「OK」をクリックします。

「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックスが表示されます。

Job Manager での Oracle BI Scheduler ジョブの追加

Job Manager に Oracle BI Scheduler のジョブを追加するには、次の手順を実行します。

Oracle BI Scheduler のジョブを Job Manager に追加するには

- 1 Job Manager で、「Jobs」→「Add New Job」を選択します。
- 2 ダイアログ・ボックスに該当する情報を入力します。
フィールドの説明は、次の各項を参照してください。
 - 「Oracle BI Scheduler のジョブの一般的なプロパティ」(28 ページ)
 - 「Oracle BI Scheduler の Job Manager のジョブのアクション」(30 ページ)
 - 「Oracle BI Scheduler の Job Manager のジョブ・トリガー」(31 ページ)

Job Manager での Oracle BI Scheduler ジョブの変更

Job Manager で Oracle BI Scheduler のジョブを変更するには、次の手順を実行します。

注意： Job Manager でジョブを追加または変更中に「Script」フィールドにスクリプトを入力すると、Oracle BI Scheduler により、このフィールドで定義されたパスに SCS 拡張子付きのファイルが作成されます。ただし、実際には Oracle BI Scheduler のバックエンド・データベースにそのジョブ・スクリプトが格納されるわけではありません。通常は、\$OracleBI¥server¥Scripts¥Scheduler ディレクトリ（\$OracleBI は Oracle BI ソフトウェアがインストールされているディレクトリ）でスクリプトの追加や削除を実行しないでください。

Oracle BI Scheduler のジョブを Job Manager で変更するには

- 1 Job Manager で、変更するジョブを選択します。
- 2 「Jobs」 → 「Modify Job」を選択します。
- 3 「Modify Job」ダイアログ・ボックスで、ジョブ・プロパティを変更します。

フィールドの詳細は、「[Oracle BI Scheduler のジョブの一般的なプロパティ](#)」(28 ページ) を参照してください。

Job Manager のデフォルト値のリストアまたは変更

Job Manager の「Scheduler」タブでフィールドの値を変更した場合は、次の手順に示すように、デフォルト値をリストアできます。

Job Manager の「Scheduler」タブでフィールドのデフォルト値をリストアまたは変更するには

- Oracle BI Scheduler とともに配布されたデフォルト値をリストアするには、「Defaults」をクリックします。
- 最後に使用されていた設定に戻すには、「Revert」をクリックします。

Oracle BI Scheduler での iBot ジョブの変更

Job Manager の「Modify Job」ダイアログ・ボックスを使用すると、iBot を個別に変更できます。

特定の iBot ジョブを変更するには

- 1 Job Manager で、変更する iBot を選択します。
- 2 「Jobs」 → 「Modify Job」を選択します。

- 3 「Modify Job」ダイアログ・ボックスで、次の表に示すように iBot のプロパティを変更します。

注意：これらのフィールドのデフォルト値は、「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックスの「iBots」タブで指定された値がアクティブであることを示しています。

iBot のプロパティ	説明
Web Server	実行時に iBot が接続する Web サーバーを指定します。 別の Web サーバーには該当の iBot が存在しない可能性があるため、この設定は変更しないでください。この機能は、デバッグのみを目的に追加されたものです。
Debug Log	デバッグ情報をログに記録するかどうかを決定します。

ジョブ・インスタンスの再実行

失敗した iBot ジョブも含めて、どのようなタイプのジョブも再実行できます。失敗した iBot ジョブを再実行したときに配信されるのは、その失敗したジョブのみです。たとえば、ある iBot に 1,000 人の受信者がいて、そのうち 200 人が適切なレポート表示権限を持たないグループに属している場合、管理者は権限設定を修正してからそのジョブを再実行できます。この例では、変更されたグループの 200 人のユーザーのみが該当の iBot を受信します（iBot の受信に成功した残りの 800 人のユーザーには、この iBot は再配信されません）。

ジョブ・インスタンスを再実行するには

- 1 Oracle BI Server Administration Tool をオンライン・モードで起動します。
- 2 ツールバーから「Manage」→「Jobs」を選択します。
「Job Manager」ウィンドウが表示されます。
- 3 インスタンスのリストに移動します。
- 4 再実行するジョブ・インスタンスを探します。
- 5 該当のジョブ・インスタンスを右クリックして、「Re-run Instance(s) Now」を選択します。

Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの管理

Oracle BI Scheduler のインスタンスとは、Oracle BI Scheduler ジョブの具体的な実行に関する情報を格納するレコードです。

Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスを使用すると、次のタスクを実行できます。

- 「Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの表示とリフレッシュ」(39 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの取消し」(39 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの消去」(40 ページ)

Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスを操作するには

- 1 「Job Manager」ウィンドウの左下隅にある「Instances」タブをクリックします。
- 2 インスタンスが複数存在する場合は、左ペインにあるツリーを使用してインスタンスを探し、情報を表示します。
 - 「Instances」メニューの詳細は、「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Instances」メニュー」(16 ページ) の表を参照してください。
 - インスタンスのプロパティの詳細は、「Oracle BI Scheduler の Job Manager のインスタンスのプロパティ」(17 ページ) の表を参照してください。

Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの表示とリフレッシュ

Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの情報は、次の方法で表示できます。

注意： 環境によっては、多数のインスタンスが実行されていて、一定の時間でインスタンスが消去されていないと、この処理に数秒かかる場合があります。

Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの情報を表示するには

- 1 Oracle BI Server Administration Tool をオンライン・モードで起動します。
- 2 ツールバーから「Manage」→「Jobs」を選択します。
「Job Manager」ウィンドウが表示されます。
- 3 インスタンスのリストに移動します。
- 4 特定のジョブ・インスタンスを選択して、「Instance」→「View Instance」を選択します。
「Instance」ウィンドウに表示されるインスタンスのプロパティの詳細は、「Oracle BI Scheduler の Job Manager のインスタンスのプロパティ」(17 ページ) の表を参照してください。

Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスをリフレッシュするには

- 「Instance List」で、「Instances」→「Refresh Instance List」を選択します。

Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの取消し

登録済の取消しメソッドについては、「RegisterCancelCommand メソッド」(59 ページ) のコマンドを参照してください。取消しイベントは、Oracle BI Scheduler に対して発行されます。登録済の取消しメソッドがコールされると、該当インスタンスが取消し済としてマークされます。

Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスを取り消すには

- 1 「Instance List」で、特定のジョブ・インスタンスを選択します。
- 2 「Instances」→「Cancel Instance(s)」を選択します。

Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスの消去

ジョブ・インスタンスの消去には、次のいずれかの方法を使用した、バックエンド・データベースからのジョブの削除が必要です。

- Job Manager の「Instances List」の使用
- Job Manager の「Purge Instances」ウィンドウの使用

Job Manager の「Instances List」の使用

次の方法では、「Instances List」を使用して Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスを消去します。

「Instances List」を使用して Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスを消去するには

- 1 Oracle BI Server Administration Tool をオンライン・モードで起動します。
- 2 ツールバーから「Manage」→「Jobs」を選択します。
「Job Manager」ウィンドウが表示されます。
- 3 インスタンスのリストに移動します。
- 4 「Instance List」からインスタンスを選択して、「Delete」を押します。

Job Manager の「Purge Instances」ウィンドウの使用

次の方法では、「Purge Instances」ウィンドウを使用してジョブ・インスタンスを消去します。

「Purge Instances」ウィンドウを使用して Oracle BI Scheduler のジョブ・インスタンスを消去するには

- 1 Oracle BI Server Administration Tool をオンライン・モードで起動します。
- 2 ツールバーから「Manage」→「Jobs」を選択します。
「Job Manager」ウィンドウが表示されます。
- 3 インスタンスのリストに移動します。
- 4 ツールバーの「Purge Instance(s)」アイコンをクリックするか、「Instances」→「Purge Instances」を選択して、「Purge Instances」ウィンドウを開きます。
インスタンスは、「JobID」、「UserID」または「End Time」に基づいて消去できます。
「End Time」に基づく方法を選択すると、「End Time」が指定された時間以前であるすべてのジョブが消去されます。
- 5 使用する消去方法を選択します。
- 6 完了したら「OK」をクリックして、「Job Manager」ウィンドウに戻ります。

他のアプリケーションのワークフロー・タスクのトリガー

Oracle Siebel Enterprise アプリケーション・ファミリーなどの実行可能なアプリケーションを Oracle BI Delivers と相互運用させて、それらのアプリケーションのワークフロー・タスクを iBot でトリガーするように設定できます。

iBot とアプリケーション・ワークフローを統合する場合は、分析クエリーの結果セットの各行によってワークフローが起動されます。該当する行とその他の非動的プロパティは、各ワークフローに特有のプロパティ・セットとして渡されます。Delivers の「Advanced」タブを使用すると、ワークフローの名前を手動で入力して特定の列と照合することにより、プロパティ・セットを構成できます。

注意： iBot が運用アプリケーションにかわってワークフローをトリガーする前に、運用アプリケーションでいくつかのタスクを実行しておく必要があります。

ワークフローを起動するように Delivers を構成するには、次の手順を実行します。

- 1 Oracle Delivers でワークフロー・アプリケーションの運用アプリケーション・サーバーを構成します。
この構成手順は、デプロイされている運用アプリケーションによって異なります。通常は、Oracle Business Intelligence 用に名前付きのサブシステムが作成されており、このようなサブシステム・コンポーネントの名前を構成ファイルの HTTP サービス・セクションに追加します。
- 2 ワークフローのトリガーを構成します。
次のいずれかの方法を選択します。
 - 「Oracle BI Scheduler でのワークフロー・トリガーの構成」(41 ページ)
 - 「Oracle BI Scheduler ジョブのサード・パーティによるトリガー」(42 ページ)
- 3 iBot にワークフロー・トリガーを作成します。
詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』の「Oracle BI Delivers の使用」を参照してください。

Oracle BI Scheduler でのワークフロー・トリガーの構成

この手順では、ワークフローを起動するように Oracle BI Scheduler を構成する方法について説明します。

ワークフローをトリガーするように Oracle BI Scheduler を構成するには

- 1 Server Administration Tool で Job Manager を起動します。
- 2 「File」 → 「Configuration Options」を選択します。
「Job Manager Configuration」ウィンドウが開きます。
- 3 「Workflow」タブをクリックします。
- 4 「Oracle BI Scheduler の Job Manager の「Workflow」タブ」(27 ページ) の情報を使用してフィールドに入力します。

Oracle BI Scheduler ジョブのサード・パーティによるトリガー

サード・パーティのアプリケーションとスクリプトを使用して、コマンドラインから Oracle BI Scheduler のジョブを起動できます。これらによって、1つのインスタンスのジョブ・パラメータを変更することもできます。この変更によって、サード・パーティでトリガーされる iBot をシミュレートできます。コマンドラインのインタフェースは、次のとおりです。

```
saschinvoke.exe -u <Admin Name>/<Admin Password> (-j <job id> |  
-i <iBot path>) [-m <machine name>[:<port>]] ([-r <replace parameter filename>] |  
[-a <append parameter filename>])
```

必須パラメータ <Admin Name> および <Admin Password> は、ジョブを起動する Oracle BI Scheduler に構成されているものと同じです。ジョブは、ジョブ ID または iBot のパスで起動できます。また、オプションで Oracle BI Scheduler サーバーのマシンとポートを指定することもできます。この指定を省略すると、起動にはそれぞれ localhost と 9705 が使用されます。

また、起動では、オプションでジョブ・パラメータ・ファイルを使用できます。選択するモードに応じて、ジョブ・パラメータ・ファイルのオプションに従い、次のいずれかの方法で Oracle BI Scheduler に構成されているパラメータが変更されます。

- 既存のパラメータを置換する（次の構文を使用）。
[-r <replace parameter filename>]
- 既存のパラメータに追加する（次の構文を使用）。
[-a <append parameter filename>]
- パラメータ・ファイルを使用する場合は、次のルールに従う。
 - 1行に1つのパラメータのみを使用する。
 - 空白はカスタム・スクリプトにより扱いが異なる場合があるため、無視しない。

置換モードの使用方法

置換モードでは、一部のパラメータを Oracle BI Scheduler の設定のまま残すようにファイルで指定できます。特定の行でこのような指定を行うには、その行に \$SCH_DEFAULT\$ と入力します。このテキスト文字列は変数の役割を果たし、\$SCH_DEFAULT\$ テキストが元の Oracle BI Scheduler のパラメータに置換されます。

たとえば、元のパラメータが hello である場合、

```
$SCH_DEFAULT$ world, $SCH_DEFAULT$ again
```

は、次のように変更されます。

```
hello world, hello again
```

saschinvoke コマンドを使用する場合は、ジョブ・パラメータが正しいことを確認してください。saschinvoke コマンドでは、パラメータが正しいかどうかはテストされません。無効なパラメータが渡されると、ジョブが適切に実行されないことがあります。

5

Oracle BI Scheduler のジョブ・スクリプトの使用

Oracle Business Intelligence Scheduler には、実行スクリプトをカプセル化するスクリプト・オブジェクトがあります。スクリプト・オブジェクトは 1 つのスクリプトを表し、スクリプトのプロパティとメソッドを公開します。スクリプトのメソッド名とプロパティ名が示されるので、これらに直接アクセスできます。たとえば、JobID プロパティにアクセスするには、Script.JobID ではなく、JobID と指定できます。

エンド・ユーザーは、Oracle BI を使用して、iBot の一部として実行するカスタム・スクリプトのアクションを指定します。このカスタム・スクリプトは、iBot のレポート結果に渡されます。これらの結果に対してカスタム処理が実行され、その後、その結果が iBot 実行エンジンの出力に返されます。

注意： iBot 用のスクリプトおよび Oracle BI Scheduler の Job Manager で定義されたスクリプトは、Windows プラットフォームでのみサポートされ、UNIX ではサポートされません。

ジョブ・スクリプトのプロパティの詳細は、次の各項を参照してください。

- 「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトの読取り専用プロパティ」 (49 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトの読取り / 書込みプロパティ」 (50 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler のスクリプト定義定数」 (51 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント」 (55 ページ)

キャッシュ・クリアを実行するための Job Manager スクリプト

この項では、Oracle BI Scheduler のスクリプトの設定例を示します。Oracle BI Scheduler は、Oracle Business Intelligence の機能を拡張するための汎用目的のスクリプトに使用できます。

次に示すスクリプト `purgeSASCACHE.js` は、Oracle BI Server のすべてのキャッシュを定期的に消去するために使用されます。

```
////////////////////////////////////  
// purgeSASCACHE.js  
//  
// Purges the cache on SAS.  
// Parameter(0) - The user name to pass in to NQCMD.  
// Parameter(1) - The password for the aforementioned user.  
////////////////////////////////////  
  
// The full path to nqcmd.exe  
var nqCmd = "[${INSTALLDIR}¥¥server¥¥Bin¥¥nqcmd.exe";  
  
// The data source name  
var dsn = "BI Web";  
  
// The user to execute the queries  
var user = Parameter(0);  
  
// The password of the aforementioned user  
var pswd = Parameter(1);  
  
// The ODBC procedure call for purging the cache  
var sqlStatement = "{call SAPurgeAllCache()}";  
  
////////////////////////////////////  
// Returns a string from the file name  
////////////////////////////////////  
  
function GetOutput(fso, fileName)  
{  
    var outputStream = fso.OpenTextFile(fileName, 1);  
    var output = outputStream.ReadAll();  
    outputStream.Close();  
    return output;  
}  
  
////////////////////////////////////  
// Get wshShell object and run nqCmd.Capture the output  
// so that we can handle erroneous conditions.  
  
var wshShell = new ActiveXObject("WScript.Shell");  
  
// Create a temp file to input the SQL statement.  
  
var fso = new ActiveXObject("Scripting.FileSystemObject");
```

```
var tempFolder = fso.GetSpecialFolder(2);
var tempInFileName = fso.GetTempName();
var tempOutFileName = fso.GetTempName();
tempInFileName = tempFolder + "%%" + tempInFileName;
tempOutFileName = tempFolder + "%%" + tempOutFileName;
var tempInFile = fso.CreateTextFile(tempInFileName, true);
tempInFile.WriteLine(sqlStatement);
tempInFile.Close();

try
{
    // execute
    var dosCmd = nqCmd + " -d %" + dsn + "%" -u %" + user
        + "%" -p %" + pswd + "%" -s %" + tempInFileName + "%"" +
        " -o %" + tempOutFileName + "%"";

    wshShell.Run(dosCmd, 0, true);

    var output = GetOutput(fso, tempOutFileName);

    // Remove the temp files
    fso.DeleteFile(tempInFileName);
    if (fso.FileExists(tempOutFileName)) {
        fso.DeleteFile(tempOutFileName);
    }

    // Check the output for any errors
    if (output.IndexOf("Processed: 1 queries") == -1) {
        ExitCode = -1;
        throw Error(-1, output);
    }

    else if (output.IndexOf("Encountered") != -1) {
        ExitCode = -2;
        throw Error(-2, output);
    }

    ExitCode = 0;
} catch (e) {
    if (fso.FileExists(tempInFileName)) {
        fso.DeleteFile(tempInFileName);
    }

    if (fso.FileExists(tempOutFileName)) {
        fso.DeleteFile(tempOutFileName);
    }
    throw e;
}
```

iBot の連鎖実行用スクリプト

この項では、Oracle BI Scheduler のスクリプトの設定例を示します。次のスクリプトでは、iBot の結果が別のディレクトリにコピーされます。ここでは、条件付きリクエストの結果を含む一時ファイルが、iBot のログ・ディレクトリにコピーされます。ファイル名には、JobID、InstanceID および UserID が使用されます。これにより、iBot の実行ごと、ユーザーごと、およびこのスクリプトを共有する他の iBot 間で結果セットが上書きされなくなります。

サンプル・スクリプトでは、次の設定を使用しています。

- Oracle BI Scheduler マシン上の iBot のログ・ディレクトリは、\$OracleBI¥server¥Log¥iBots (\$OracleBI は Oracle BI ソフトウェアがインストールされているディレクトリ)。
- iBot は Administrator として実行される。
- カスタム・スクリプトのプロパティは、「[Oracle BI Delivers のカスタム・スクリプトのプロパティの構成](#) (48 ページ) の表に従って設定される。
- ジョブ ID は 101 (Oracle BI Scheduler によって割り当てられる)。
- インスタンス ID は 1208 (Oracle BI Scheduler によって割り当てられる)。

iBot の実行後、この例の出力は、Oracle BI Scheduler マシン上の D:¥OracleBI¥Log¥iBots¥101-1208-Administrator-iBotScript1.PDF というファイルになります。このファイルには、条件付きリクエストの結果が PDF フォーマットで含まれます。

連鎖実行される iBot のすべてのスクリプトに対応できるように、Parameter(0) には一時ファイルのフルパス名が指定されています。

```

////////////////////////////////////
//
// createResultFile.js
//
// Copies the results in the temporary file to a new file name
//
// Parameter(0) = iBot Result File Path
// Parameter(1) = Last Part of Output File Name (no path)
//
////////////////////////////////////

var FSO = new ActiveXObject("Scripting.FileSystemObject");

var fileName = GetConfigurationValue("Log Dir", "iBots") +
  "¥¥" + JobID + "-" + InstanceID + "-" + UserID + "-" +
  Parameter(1);

var fooFile = FSO.CopyFile(Parameter(0), fileName, true);

```

Oracle BI Scheduler のカスタム・スクリプト のプロパティの構成

Oracle BI Scheduler のスクリプトのプロパティを変更するには、次の手順を実行します。

注意： スクリプトのプロパティを構成するには、Oracle BI Scheduler サーバー・マシンにスクリプトが存在している必要があります。

Oracle BI Scheduler のカスタム・スクリプトのプロパティを構成するには

- 1 「Oracle BI Scheduler の Job Manager のジョブのアクション」(30 ページ) の説明に従って、カスタム・プロパティを設定します。

たとえば、スクリプト `purgeSASCACHE.js` には、次の表に示す値を使用します。SASCACHE.js スクリプトの例は、「キャッシュ・クリアを実行するための Job Manager スクリプト」(44 ページ) を参照してください。

フィールド	値または設定
Script Type	JScript
Script Contains File Name	選択する
Script	<code>purgeSASCACHE.js</code>
Parameters:	
Parameter(0): User	Administrator
Parameter(1): Password	SADMIN

- 2 「OK」をクリックします。

Oracle BI Delivers のカスタム・スクリプトの プロパティの構成

スクリプトのプロパティは、Oracle BI Delivers の iBot の「Advanced」タブで設定します。詳細は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。また、「[Oracle BI Scheduler での iBot ジョブの変更](#)」(37 ページ) も参照してください。

注意： iBot を作成するには、Oracle BI Scheduler サーバー・マシンにスクリプトが存在している必要があります。カスタム・スクリプトを作成してから、そのスクリプトをコールする iBot を作成します。

Delivers のカスタム・スクリプトのプロパティを構成するには

- 1 画面で目的の iBot を選択し、「Advanced」タブをクリックします。
- 2 「Custom Script Properties」ウィンドウでプロパティを入力します。
たとえば、「iBot の連鎖実行用スクリプト」には、次の表に示す値を使用します。

フィールド	値または設定
Filename	createResultfile.js
Type	JScript
Results	Pass results of Conditional Request as a script Pass results as PDF
Other Parameters	iBotScript1.PDF

- 3 「OK」をクリックします。
- 4 iBot を実行します。
このスクリプトは、iBot の条件付きリクエストが実行されてから実行されます。

Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトの読取り専用プロパティ

Oracle BI Scheduler は、[49 ページの表 17](#) に示す、スクリプト・オブジェクトの読取り専用プロパティをサポートします。

表 17. Scheduler のスクリプト・オブジェクトの読取り専用プロパティ

オブジェクト・プロパティ	説明	戻り値	構文
JobID	インスタンスに関連付けられているジョブ ID 番号を返します。	long	
InstanceID	インスタンスに関連付けられているインスタンス ID 番号を返します。		
ParameterCount	ジョブ・スクリプトに関連付けられているジョブ・パラメータ数を返します。	long	
Parameter (index)	スクリプトに関連付けられている特定のパラメータを返します。Parameter (index) は、指定されたインデックスがゼロより小さいか、ParameterCount から 1 を引いた数より大きい場合、エラーを返します。	string	Parameter(index) index は、ゼロベースのインデックス・パラメータです。
Script	現在のスクリプトを表すスクリプト・オブジェクトを返します。このオブジェクトは COM IDispatch インタフェースを実装し、システム上に存在する他のオブジェクトに引数として渡すことができます。COM IDispatch の実装は、実行中のインスタンスに対する取消しイベントを処理する場合に特に便利です。 「RegisterCancelCommand メソッド」(59 ページ) を参照してください。	スクリプト・オブジェクト	
UserID	インスタンスに関連付けられているユーザー ID 番号を返します。	string	

Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトの読取り / 書込みプロパティ

Oracle BI Scheduler は、50 ページの表 18 に示す、スクリプト・オブジェクトの読取り / 書込みプロパティをサポートします。

表 18. Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトの読取り / 書込みプロパティ

オブジェクト・プロパティ	説明	戻り値
Message	<p>実行インスタンスの Message プロパティを設定するか、返します。重要なエラー情報の伝達には、ErrorMessage プロパティを使用できます。この値を設定すると、現在のジョブ・スクリプトの実行を停止することなく、ジョブ・インスタンスの「Error Message」フィールドが変更されます。</p> <p>Windows 環境では、このプロパティが設定されている場合に JScript の throw() メソッドがコールされると、この値が JScript または VBScript の Error オブジェクトのメッセージの説明に追加されます。</p> <p>IDispatch インタフェースを実装する COM オブジェクトには、ジョブ・スクリプト内からアクセスできます。メソッドが失敗し、SetErrorInfo() メソッドでエラー情報が適切に示される場合は、その情報がジョブ・インスタンスの「Message」フィールドに含まれます。COM オブジェクトのエラーが生成される前に Message プロパティが設定されている場合は、その文字列値が COM オブジェクトのエラー情報に追加されます。</p>	string
Severity	<p>インスタンスのステータスを設定します。任意の Severity 定数に設定できます（「Severity 定数」(51 ページ) を参照）。デフォルトでは、nqSeverityInformation に設定されています。</p>	string
ExitCode	<p>インスタンスに関連付けられている ExitCode プロパティを設定するか、返します。デフォルトは 0（ゼロ）です。詳細は、「Oracle BI Scheduler の Job Manager のインスタンスのプロパティ」(17 ページ) でインスタンスの ExitCode プロパティの説明を参照してください。</p>	long

Oracle BI Scheduler のスクリプト定義定数

Oracle BI Scheduler は、次のスクリプト定義定数をサポートします。これらの定数は、新しいジョブをスケジュールするためにメソッドによって使用されます。

- 「Severity 定数」 (51 ページ)
- 「DayEnum 定数」 (52 ページ)
- 「DayOfWeekEnum 定数」 (52 ページ)
- 「JobFlagsEnum 定数」 (53 ページ)
- 「MonthEnum 定数」 (53 ページ)
- 「OccurrenceEnum 定数」 (54 ページ)

Severity 定数

この項は、「Oracle BI Scheduler のスクリプト定義定数」の一部です。

Severity 定数値は、スクリプトによって返される Message (エラー・メッセージ) の重大度を示すプロパティで使用され、ジョブ・インスタンスのステータスを特定します。51 ページの表 19 に Severity 定数の値を示します。

表 19. Severity 定数の値

値	説明
nqSeverityInformation	Message にジョブ・インスタンスの情報のみが含まれ、エラー状態を示していない場合、Severity プロパティを <i>Information</i> に設定します。インスタンスのステータスは「Completed」に設定されます。これは、Severity が設定されていない場合のデフォルトです。
nqSeverityWarning	Message に重大でないエラーを示すテキストが含まれる場合、Severity プロパティを <i>Warning</i> に設定します。インスタンスのステータスは「Warning」に設定されます。
nqSeverityError	Message に重大なエラーを示すテキストが含まれる場合、Severity プロパティを <i>Error</i> に設定します。インスタンスのステータスは「Failed」に設定されます。

DayEnum 定数

この項は、「[Oracle BI Scheduler のスクリプト定義定数](#)」の一部です。

DayEnum 定数値は、スケジュール機能で日付の指定に使用され、1 日から 31 日まであります。[52 ページの表 20](#)に DayEnum 定数の値を示します。

表 20. DayEnum 定数の値

値	説明
nqDay1	1 日
nqDay2	2 日
nqDay3	3 日
...	...
nqDay31	31 日

DayOfWeekEnum 定数

この項は、「[Oracle BI Scheduler のスクリプト定義定数](#)」の一部です。

DayOfWeekEnum 定数値は、スケジュール機能で曜日の指定に使用されます。[52 ページの表 21](#)に DayOfWeekEnum 定数の値を示します。

表 21. DayOfWeekEnum 定数の値

値	説明
nqSunday	日曜日
nqMonday	月曜日
nqTuesday	火曜日
nqWednesday	水曜日
nqThursday	木曜日
nqFriday	金曜日
nqSaturday	土曜日

JobFlagsEnum 定数

この項は、「[Oracle BI Scheduler のスクリプト定義定数](#)」の一部です。

JobFlagsEnum 定数値は、スクリプト・オブジェクトのスケジュール・メソッドで、ジョブの動作の制御に使用されます。[53 ページの表 22](#)に JobFlagsEnum 定数の値を示します。

表 22. JobFlagsEnum 定数の値

値	説明
nqJobNoFlags	ジョブに特別な動作はありません。
nqJobDeleteWhenDone	スケジュールされた実行時間がない状態になると、ジョブは削除されます。
nqJobDisabled	ジョブは無効化されます。スケジュールした時間（複数可）にジョブを実行しないようにする場合に便利です。
nqJobHasEndDate	ジョブに有効な終了日があります。
nqJobExecuteWhenMissed	このフラグは、ジョブの起動時間になんらかの理由で Oracle Business Intelligence Scheduler が停止している場合、Oracle BI Scheduler の再起動時にそのジョブを実行するように指定します。
nqJobDeleteScriptWhenDone	このフラグが設定されている場合にジョブが削除されると、そのジョブに関連付けられているスクリプトが削除されます。 nqJobScriptContainsPath フラグと組み合わせて指定する場合にのみ役立ちます。
nqJobScriptContainsPath	このフラグは、ジョブに関連付けられているスクリプトに、実際のスクリプト・コードを格納したファイルのパスが含まれていることを示します。
nqJobStartNow	このフラグが設定されている場合、開始日と開始時間は無視されます。かわりに、これらのフィールドは、Oracle Business Intelligence Scheduler の現在の時間に設定されます。

MonthEnum 定数

この項は、「[Oracle BI Scheduler のスクリプト定義定数](#)」の一部です。

MonthEnum 定数値は、スケジュール機能で月の指定に使用されます。[53 ページの表 23](#)に MonthEnum 定数の値を示します。

表 23. MonthEnum 定数の値

値	説明
nqJanuary	1 月
nqFebruary	2 月
nqMarch	3 月

表 23. MonthEnum 定数の値

値	説明
nqApril	4 月
nqMay	5 月
nqJune	6 月
nqJuly	7 月
nqAugust	8 月
nqSeptember	9 月
nqOctober	10 月
nqNovember	11 月
nqDecember	12 月

OccurrenceEnum 定数

この項は、「[Oracle BI Scheduler のスクリプト定義定数](#)」の一部です。

OccurrenceEnum 定数値は、スケジュール機能で特定の日の発生回数の指定に使用されます。[54 ページの表 24](#)に OccurrenceEnum 定数の値を示します。

表 24. OccurrenceEnum 定数の値

値	説明
nqFirst	最初の発生
nqSecond	2 回目の発生
nqThird	3 回目の発生
nqFourth	4 回目の発生
nqLast	最後の発生

Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント

この項は、「Oracle BI Scheduler のジョブ・スクリプトの使用」の一部です。

次の各項では、Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベントについて、その使用方法、構文および引数を含めて説明します。

- 「CreateArray メソッド」 (56 ページ)
- 「DeregisterCancelCommand メソッド」 (57 ページ)
- 「GetConfigurationValue メソッド」 (57 ページ)
- 「GetTempFileName メソッド」 (58 ページ)
- 「LaunchProcess メソッド」 (58 ページ)
- 「RegisterCancelCommand メソッド」 (59 ページ)
- 「ScheduleJobDaily メソッド」 (59 ページ)
- 「ScheduleJobMonthlyDate メソッド」 (60 ページ)
- 「ScheduleJobMonthlyDOW メソッド」 (61 ページ)
- 「ScheduleJobNow メソッド」 (63 ページ)
- 「ScheduleJobOnce メソッド」 (63 ページ)
- 「ScheduleJobWeekly メソッド」 (64 ページ)
- 「OnError イベント」 (65 ページ)

CreateArray メソッド

この項は、「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント」の一部です。

Array オブジェクトを作成します。

使用方法： ローカルの JScript Array オブジェクトはスクリプトのメソッドに直接渡せないため、このメソッドは JScript 専用に提供されます。このメソッドをコールする、Array オブジェクトが作成され、配列を引数として受け取るスクリプトのメソッドにその Array オブジェクトが渡されます。

構文 1: Set array = CreateArray ()

構文 2: Set array = CreateArray (size)

構文 3: Set array = CreateArray (element 0, element 1, ..., element *n*)

各構文では、次のように配列が作成されます。

- 構文 1 では、サイズが 0（ゼロ）の配列が作成されます。
- 構文 2 では、指定されたサイズの配列が作成されます。
- 構文 3 では、指定された要素を持つ配列が作成されます。

例

```
var i;
var array1= CreateArray(2);
for (i = 0; i < array1.Size; i++)
{
    array1(i) = i;
}

array1.Resize(4);
for (i = 2; i < array1.Size; i++)
{
    array1(i) = i;
}

var array2 = CreateArray(0, 1, 2,3);
for (i = 0; i < array2.Size; i++)
{
    if (array1(i) != array2(i))
        break;
}
```

引数： CreateArray メソッドの引数の詳細は、[57 ページの表 25](#) を参照してください。

戻り値：Array オブジェクト

表 25. CreateArray メソッドの引数

引数	説明
size	配列の初期サイズを指定する long 値。
element0 ... elementn	配列に格納する値。これにより、下限と上限がそれぞれ 0（ゼロ）および n の配列が作成されます。

DeregisterCancelCommand メソッド

この項は、「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント」の一部です。

以前に登録した取消しメソッドの登録を解除します。

使用方法：このメソッドをコールすると、長い処理が正常に実行された後、最後に登録された取消しメソッドの登録が解除されます。スクリプトが取り消された場合は、このメソッドをコールする必要はありません。

構文：DeregisterCancelCommand

GetConfigurationValue メソッド

この項は、「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント」の一部です。

Oracle Business Intelligence Scheduler の構成値を Oracle BI Scheduler のルート・レジストリ・エン트리と比較して返します。

使用方法：GetConfigurationValue() は、レジストリ設定の文字列値を Oracle Business Intelligence Scheduler の設定と比較して返します。configKey および subkeyPath 文字列は、レジストリのもので同一である必要があります。

構文：value = GetConfigurationValue(*configKey* [, *subkeyPath*])

引数：GetConfigurationValue メソッドの引数の詳細は、57 ページの表 26 を参照してください。

戻り値：文字列値

表 26. GetConfigurationValue メソッドの引数

引数	説明
configKey	返されるレジストリ・キー名を指定する文字列。
subkeyPath	(オプション) Oracle BI Scheduler のルート・パス下のレジストリ・パスを指定する文字列値。

GetTempFileName メソッド

この項は、「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント」の一部です。

一時ファイル名を返します。

使用方法： GetTempFileName() ではファイルは作成されません。ファイルの作成に使用可能な一時ファイルの名前が得られるだけです。ジョブ・スクリプトで作成されたファイルは、スクリプトが終了しても自動的に削除されません。

構文： tfname = GetTempFileName()

戻り値： 文字列値

LaunchProcess メソッド

この項は、「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント」の一部です。

コマンドラインを新しいプロセスで実行します。

使用方法： このメソッドをコールすると、コマンドラインが新しいプロセスで実行されます。wait が True に設定されている場合は、プロセスによって返される終了コードが返されます。

構文： exitcode = LaunchProcess (commandLine [, wait, terminateOnCancel])

引数： LaunchProcess メソッドの引数の詳細は、58 ページの表 27 を参照してください。

戻り値： long 値

表 27. LaunchProcess メソッドの引数

引数	説明
commandLine	実行するコマンドラインを指定する文字列。
wait	(オプション) プロセスが終了まで待機するかどうかを指定するブール値。デフォルトは True です。
terminateOnCancel	(オプション) スクリプトが取り消された場合に、このメソッドでプロセスを終了させるかどうかを指定するブール値。デフォルトは True です。

RegisterCancelCommand メソッド

この項は、「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント」の一部です。

スクリプトが取り消された場合にコールされるメソッドを登録します。

使用方法：オブジェクトのメソッドの完了には長時間かかる場合があります。コールが返される前にジョブが取り消されても、スクリプト・エンジンは、そのコールが返されるまで待機する必要があります。これにより、処理に何時間もかかったり、リソースが制限されたりする場合があります。このメソッドでは、スクリプトが取り消された場合にスクリプト・エンジンから非同期にコールされるメソッドを登録することによって、この問題を解決します。

取消しメソッドは、時間のかかる処理を実行するメソッドをコールする前に登録しておく必要があります。メソッドが返された場合は、DeregisterCancelCommand() をコールして、取消しメソッドの登録を解除する必要があります。

COM オブジェクトの実装の詳細をコール元からは隠して、取消しコマンドのすべての登録と登録解除を COM オブジェクト自体で処理することをお勧めします。スクリプト・オブジェクトは IDispatch インタフェースを実装しているため、スクリプト・オブジェクトのインスタンスを COM オブジェクトに渡してから、RegisterCancelCommand() メソッドおよび DeregisterCancelCommand() メソッドをコールします。

構文：RegisterCancelCommand source, methodName [, arguments]...

引数：RegisterCancelCommand メソッドの引数の詳細は、59 ページの表 28 を参照してください。

表 28. RegisterCancelCommand メソッドの引数

引数	説明
source	メソッド登録の対象となるオブジェクト。
methodName	メソッド名を指定する文字列。
arguments	メソッドに渡すオプションの引数。

ScheduleJobDaily メソッド

この項は、「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント」の一部です。

日単位のトリガーを持つ新しいジョブをスケジュールします。

構文：ScheduleJobDaily name, description, scriptType, script, startDate, startTime, endTime, minutesInterval, daysInterval [, parameters, flags, maxRunTimeMS, maxConcurrentInstances, endDate]

引数：ScheduleJobDaily メソッドの引数の詳細は、60 ページの表 29 を参照してください。

表 29. ScheduleJobDaily メソッドの引数

引数	説明
name	ジョブの名前を指定する文字列。
description	ジョブの説明を指定する文字列。
scriptType	ジョブに関連付けられているスクリプト・タイプを指定する文字列 (VBScript または JScript)。
script	ジョブに関連付けられているスクリプトのコードまたはパス (nqJobScriptContainsPath フラグが設定されている場合) を指定する文字列。
startDate	ジョブをアクティブにする日付を指定する日付値。
startTime	ジョブをアクティブにする時間を指定する日付値。
endTime	ジョブを非アクティブにする時間を指定する日付値。
minutesInterval	連続して実行するジョブ間の時間間隔を指定する long 値。
daysInterval	ジョブを起動する日数間隔を指定する integer 値。
parameters	(オプション) スクリプトに渡すパラメータ値の文字列配列。デフォルトは空の配列です。
flags	(オプション) ジョブに関連付けられているフラグを指定する long 値。有効な設定については、「 JobFlagsEnum 定数 」(53 ページ) を参照してください。デフォルトは nqJobNoFlags です。
maxRunTimeMS	(オプション) ジョブを実行する最大時間を秒単位で指定する long 値。この時間を経過するとジョブは終了します。デフォルト値は 0 (ゼロ) です。これはジョブが永続的に実行されることを意味します。
maxConcurrentInstances	(オプション) このジョブの同時実行インスタンスの最大数を指定する long 値。デフォルトは 0 (ゼロ) で、制限がないことを意味します。
endDate	(オプション) ジョブを非アクティブにする時間を指定する日付値。

ScheduleJobMonthlyDate メソッド

この項は、「[Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント](#)」の一部です。

月ごとに決まった日のトリガーを持つ新しいジョブをスケジュールします。

構文: ScheduleJobMonthlyDate name, description, scriptType, script, startDate, startTime, endTime, minutesInterval, whichDays, whichMonths [, parameters, flags, maxRunTimeMS, maxConcurrentInstances, endDate]

引数: ScheduleJobMonthlyDate メソッドの引数の詳細は、[61 ページの表 30](#) を参照してください。

表 30. ScheduleJobMonthlyDate メソッドの引数

引数	説明
name	ジョブの名前を指定する文字列。
description	ジョブの説明を指定する文字列。
scriptType	ジョブに関連付けられているスクリプト・タイプを指定する文字列 (VBScript または JScript)。
script	ジョブに関連付けられているスクリプトのコードまたはパス (nqJobScriptContainsPath フラグが設定されている場合) を指定する文字列。
startDate	ジョブをアクティブにする日付を指定する日付値。
startTime	ジョブをアクティブにする時間を指定する日付値。
endTime	ジョブを非アクティブにする時間を指定する日付値。
minutesInterval	連続して実行するジョブ間の時間間隔を指定する long 値。
whichDays	ジョブを実行する日付を指定する long 値。有効な設定については、「 DayEnum 定数 」(52 ページ) を参照してください。
whichMonths	ジョブを実行する月を指定する integer 値。有効な設定については、「 MonthEnum 定数 」(53 ページ) を参照してください。
parameters	(オプション) スクリプトに渡すパラメータ値の文字列配列。デフォルトは空の配列です。
flags	(オプション) ジョブに関連付けられているフラグを指定する long 値。有効な設定については、「 JobFlagsEnum 定数 」(53 ページ) を参照してください。デフォルトは nqJobNoFlags です。
maxRunTimeMS	(オプション) ジョブを実行する最大時間を秒単位で指定する long 値。この時間を経過するとジョブは終了します。デフォルト値は 0 (ゼロ) です。これはジョブが永続的に実行されることを意味します。
maxConcurrentInstances	(オプション) このジョブの同時実行インスタンスの最大数を指定する long 値。デフォルトは 0 (ゼロ) で、制限がないことを意味します。
endDate	(オプション) ジョブを非アクティブにする時間を指定する日付値。

ScheduleJobMonthlyDOW メソッド

この項は、「[Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント](#)」の一部です。

月ごとに決まった曜日 (DOW) のトリガーを持つ新しいジョブをスケジュールします。

構文: scheduleJobMonthlyDOW name, description, scriptType, script, startDate, startTime, endTime, minutesInterval, whichOccurrences, whichDays, whichMonths [, parameters, flags, maxRunTimeMS, maxConcurrentInstances, endDate]

引数：ScheduleJobMonthlyDOW メソッドの引数の詳細は、62 ページの表 31 を参照してください。

表 31. ScheduleJobMonthlyDOW メソッドの引数

引数	説明
name	ジョブの名前を指定する文字列。
description	ジョブの説明を指定する文字列。
scriptType	ジョブに関連付けられているスクリプト・タイプを指定する文字列 (VBScript または JScript)。
script	ジョブに関連付けられているスクリプトのコードまたはパス (nqJobScriptContainsPath フラグが設定されている場合) を指定する文字列。
startDate	ジョブをアクティブにする日付を指定する日付値。
startTime	ジョブをアクティブにする時間を指定する日付値。
endTime	ジョブを非アクティブにする時間を指定する日付値。
minutesInterval	連続して実行するジョブ間の時間間隔を指定する long 値。
whichOccurrences	ジョブの実行が週のどの曜日に発生するかを指定する integer 値。有効な設定については、「DayEnum 定数」(52 ページ) を参照してください。
whichDays	ジョブを実行する曜日を指定する integer 値。有効な設定については、「DayOfWeekEnum 定数」(52 ページ) を参照してください。
whichMonths	ジョブを実行する月を指定する integer 値。有効な設定については、「MonthEnum 定数」(53 ページ) を参照してください。
parameters	(オプション) スクリプトに渡すパラメータ値の文字列配列。デフォルトは空の配列です。
flags	(オプション) ジョブに関連付けられているフラグを指定する long 値。有効な設定については、「JobFlagsEnum 定数」(53 ページ) を参照してください。デフォルトは nqJobNoFlags です。
maxRunTimeMS	(オプション) ジョブを実行する最大時間を秒単位で指定する long 値。この時間を経過するとジョブは終了します。デフォルト値は 0 (ゼロ) です。これはジョブが永続的に実行されることを意味します。
maxConcurrentInstances	(オプション) このジョブの同時実行インスタンスの最大数を指定する long 値。デフォルトは 0 (ゼロ) で、制限がないことを意味します。
endDate	(オプション) ジョブを非アクティブにする時間を指定する日付値。

ScheduleJobNow メソッド

この項は、「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント」の一部です。

即時実行のトリガーを持つ新しいジョブをスケジュールします。

構文: `ScheduleJobNow name, description, scriptType, script [, parameters, flags, maxRunTimeMS]`

引数: ScheduleJobNow メソッドの引数の詳細は、63 ページの表 32 を参照してください。

表 32. ScheduleJobNow メソッドの引数

引数	説明
name	ジョブの名前を指定する文字列。
description	ジョブの説明を指定する文字列。
scriptType	ジョブに関連付けられているスクリプト・タイプを指定する文字列 (VBScript または JScript)。
script	ジョブに関連付けられているスクリプトのコードまたはパス (nqJobScriptContainsPath フラグが設定されている場合) を指定する文字列。
parameters	(オプション) スクリプトに渡すパラメータ値の文字列配列。デフォルトは空の配列です。
flags	(オプション) ジョブに関連付けられているフラグを指定する long 値。有効な設定については、「JobFlagsEnum 定数」(53 ページ) を参照してください。デフォルトは nqJobNoFlags です。
maxRunTimeMS	(オプション) ジョブを実行する最大時間を秒単位で指定する long 値。この時間を経過するとジョブは終了します。デフォルト値は 0 (ゼロ) です。これはジョブが永続的に実行されることを意味します。

ScheduleJobOnce メソッド

この項は、「Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント」の一部です。

1 回のみ実行のトリガーを持つ新しいジョブをスケジュールします。

構文: `ScheduleJobOnce name, description, scriptType, script, startDate, startTime [, parameters, flags, maxRunTimeMS]`

引数: ScheduleJobOnce メソッドの引数の詳細は、64 ページの表 33 を参照してください。

表 33. ScheduleJobOnce メソッドの引数

引数	説明
name	ジョブの名前を指定する文字列。
description	ジョブの説明を指定する文字列。
scriptType	ジョブに関連付けられているスクリプト・タイプを指定する文字列 (VBScript または JScript)。
script	ジョブに関連付けられているスクリプトのコードまたはパス (nqJobScriptContainsPath フラグが設定されている場合) を指定する文字列。
startDate	ジョブをアクティブにする日付を指定する日付値。
startTime	ジョブをアクティブにする時間を指定する日付値。
parameters	(オプション) スクリプトに渡すパラメータ値の文字列配列。デフォルトは空の配列です。
flags	(オプション) ジョブに関連付けられているフラグを指定する long 値。有効な設定については、「 JobFlagsEnum 定数 」(53 ページ) を参照してください。デフォルトは nqJobNoFlag です。
maxRunTimeMS	(オプション) ジョブを実行する最大時間を秒単位で指定する long 値。この時間を経過するとジョブは終了します。デフォルト値は 0 (ゼロ) です。これはジョブが永続的に実行されることを意味します。

ScheduleJobWeekly メソッド

この項は、「[Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント](#)」の一部です。

週ごとのトリガーを持つ新しいジョブをスケジュールします。

構文: ScheduleJobWeekly name, description, scriptType, script, startDate, startTime, endTime, minutesInterval, weeksInterval, whichDays [, parameters, flags, maxRunTimeMS, maxConcurrentInstances, endDate]

引数: ScheduleJobWeekly メソッドの引数の詳細は、[64 ページの表 34](#) を参照してください。

表 34. ScheduleJobWeekly メソッドの引数

引数	説明
name	ジョブの名前を指定する文字列。
description	ジョブの説明を指定する文字列。
scriptType	ジョブに関連付けられているスクリプト・タイプを指定する文字列 (VBScript または JScript)。

表 34. ScheduleJobWeekly メソッドの引数

引数	説明
script	ジョブに関連付けられているスクリプトのコードまたはパス (nqJobScriptContainsPath フラグが設定されている場合) を指定する文字列。
startDate	ジョブをアクティブにする日付を指定する日付値。
startTime	ジョブをアクティブにする時間を指定する日付値。
endTime	ジョブを非アクティブにする時間を指定する日付値。
minutesInterval	連続して実行するジョブ間の時間間隔を指定する long 値。
weeksInterval	ジョブを起動する週数間隔を指定する integer 値。
whichDays	ジョブを実行する曜日指定する integer 値。有効な設定については、「 DayOfWeekEnum 定数 」(52 ページ) を参照してください。
parameters	(オプション) スクリプトに渡すパラメータ値の文字列配列。デフォルトは空の配列です。
flags	(オプション) ジョブに関連付けられているフラグを指定する long 値。有効な設定については、「 JobFlagsEnum 定数 」(53 ページ) を参照してください。デフォルトは nqJobNoFlags です。
maxRunTimeMS	(オプション) ジョブを実行する最大時間を秒単位で指定する long 値。この時間を経過するとジョブは終了します。デフォルト値は 0 (ゼロ) です。これはジョブが永続的に実行されることを意味します。
maxConcurrentInstances	(オプション) このジョブの同時実行インスタンスの最大数を指定する long 値。デフォルトは 0 (ゼロ) で、制限がないことを意味します。
endDate	(オプション) ジョブを非アクティブにする時間を指定する日付値。

OnError イベント

この項は、「[Oracle BI Scheduler のスクリプト・オブジェクトのメソッドとイベント](#)」の一部です。

スクリプトの実行中、スクリプト・エンジンに実行時エラーがあった場合に発生します。このイベントはクリーンアップを目的としていますが、多くの場合、かわりに JScript で try/catch ブロックを利用したり、VBScript で適切なエラー処理を実行するほうが優れた方法となります。

使用方法: スクリプトの実行中、スクリプト・エンジンに実行時エラーがあった場合に、スクリプト・エンジンによってこのプロシージャがコールされます。スクリプトを終了する前に、一時ファイルの削除やリソースの解放など、なんらかのクリーンアップ・アクティビティを実行する場合は、スクリプトにこのプロシージャを定義します。

構文: OnError

例

■ VBScript での使用方法は、次のとおりです。

```
Public Sub OnError()  
    LogFile.WriteLine "Encountered a runtime error in the script."  
    LogFile.Close  
End Sub
```

- JScript での使用方法は、次のとおりです。

```
function OnError()  
{  
    LogFile.WriteLine("Encountered a runtime error in the  
    script.");  
    LogFile.Close();  
}
```

6

Oracle BI Scheduler の Java ジョブ・プロパティの構成

Oracle BI Scheduler の Java ジョブ

Oracle BI Scheduler には、カスタム Java プログラムをサポートするために、Oracle BI Java Host が統合されています。Oracle BI Scheduler は、2 つの Java インタフェース (SchedulerJavaExtension および SchedulerJobInfo) と 1 つの Java クラス (SchedulerJobException) を公開しています。

注意: Oracle BI Java Host の詳細は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

Oracle BI の Java インタフェースと Java クラスに基づいて、エンド・ユーザーは SchedulerJavaExtension インタフェースを実装できます。コンパイル済のクラスは、iBot でそのクラスの名前、パスおよびその他のユーティリティ・パス情報を使用するように設定することにより、iBot の一部として実行できます。

この章の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI Scheduler の Java ジョブ・プロパティの構成」 (68 ページ)
- 「Oracle BI Delivers の Java ジョブ・プロパティの構成」 (68 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler のカスタム Java プログラム・パッケージ」 (69 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler の Java 拡張例」 (73 ページ)

Oracle BI Scheduler の Java ジョブ・プロパティの構成

Oracle BI Scheduler の Java ジョブ・プロパティを変更するには、次の手順を実行します。

注意：プロパティを構成するには、Oracle BI Java Host マシンにコンパイル済の Java クラス・ファイルが存在している必要があります。

Oracle BI Scheduler の Java ジョブ・プロパティを構成するには

- 1 Job Manager にアクセスし、「Jobs」→「Add New Job」をクリックします。

「Add New job」ウィンドウが表示されます。

- 2 「Script Type」フィールドで「Java」を選択します。

- 3 カスタム・プロパティを指定します。これらのプロパティの設定の詳細は、「[Oracle BI Scheduler の Job Manager のジョブのアクション](#)」(30 ページ) を参照してください。

例として、クラス名が sample.Test、ファイル・パスが Sample の Java ジョブの値と設定を次に示します。その他のパスやパラメータは含まれていません。

フィールド	値または設定
Script Type	Java
Class Name	sample.Test
Class File (Jar File)	Sample

- 4 「OK」をクリックします。

Oracle BI Delivers の Java ジョブ・プロパティの構成

Oracle BI Delivers の iBot の「Advanced」タブで Java ジョブ・プロパティを設定するには、次の手順を実行します。このタスクを実行する前に、コンパイル済の Java クラス・ファイルが Oracle BI Java Host マシンに存在していることを確認してください。

詳細は、「[Oracle BI Scheduler での iBot ジョブの変更](#)」(37 ページ) および『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

Oracle BI Delivers の Java ジョブ・プロパティを構成するには

- 1 Delivers アプリケーションにアクセスし、カスタム Java プログラムを追加する iBot を選択します。
- 2 「Advanced」タブを選択します。

- 「Add Action」 ボタンをクリックし、「Custom Java Program」 を選択します。
「Custom Java Program Properties」 ウィンドウが表示されます。
- プロパティを入力します。
例として、クラス名が test.Sample、クラス・パスが Sample の Java ジョブの値と設定を次に示します。
その他のパスやパラメータは含まれていません。

フィールド	値または設定
Class Name	test.Sample
Class Path	Sample
Results	Pass Delivery content to Java program

- 「OK」 をクリックします。
- iBot を実行します。
カスタム Java プログラムが実行され、配信コンテンツがカスタム Java プログラムに送信されます。

Oracle BI Scheduler のカスタム Java プログラム・パッケージ

Oracle BI Scheduler のカスタム Java プログラムのパブリック・インタフェースおよびパブリック・クラスは、*com.siebel.analytics.scheduler.javahostrpcalls* としてパッケージ化されています。2つのインタフェースと1つのクラスがあり、これらについて次の各項で説明します。

- 「SchedulerJavaExtension インタフェース」 (70 ページ)
- 「SchedulerJobInfo インタフェース」 (70 ページ)
- 「SchedulerJobException クラス」 (72 ページ)

SchedulerJavaExtension インタフェース

次に、SchedulerJavaExtension インタフェースのクラスを示します。

```
package com.siebel.analytics.scheduler.javaostrpcalls;
public interface SchedulerJavaExtension {
    public void run(SchedulerJobInfo jobInfo) throws SchedulerJobException;
    public void cancel();
}
```

このインタフェースには、2つのメソッド（run と cancel）があります。このインタフェースを実装し、コンパイル済のクラス・ファイルを iBot 実行の一部として Java Host インスタンスに組み込むことができます。次の表に、メソッドの説明を示します。

メソッド	説明
run	このメソッドは、Java Host によって起動されます。このメソッドは、次に説明するように、1つの SchedulerJobInfo オブジェクトを取ります。このオブジェクトには、ユーザー ID、ジョブ ID、インスタンス ID、パラメータなど、インスタンスに関連付けられたプロパティが含まれます。さらにこのメソッドは、SchedulerJobException をスローするように宣言されます。これについても次に説明します。
cancel	このメソッドは、ジョブ・インスタンスの実行中、Scheduler がそのジョブを取り消す場合に起動されます。ユーザーは、ルーチンをクリーンアップするリソースを埋め込むことができます。

SchedulerJobInfo インタフェース

次に、SchedulerJobInfo インタフェースの構造を示します。

```
package com.siebel.analytics.scheduler.javaostrpcalls;
import java.io.*;
public interface SchedulerJobInfo {
    public final int kJavaJobInformation = 0;
    public final int kJavaJobWarning = 1;
    public final int kJavaJobError = 2;
    int jobID();
    int instanceID();
    int parameterCount();
    String parameter(int index);
    boolean hasResultSet();
    File getResultSetFile();
    String userID();
    int getExitCode();
    void setExitCode(int exitCode);
    int getStatus();
    void setStatus(int status);
    String getMessage();
    void setMessage(String message);

    void appendMessage(String message);
}
```

このインタフェースは、SchedulerJavaExtension インタフェースで実装される任意のクラスの *run* メソッドのパラメータによって実装されます。

状況に応じてステータスを設定するために、3つの `public final integer` (*kJavaJobInformation*、*kJavaJobWarning* および *kJavaJobError*) を使用できるようになっています。次の表に、その状況の説明を示します。

メンバー	説明
<code>public final int kJavaJobInformation = 0</code>	情報メッセージを格納します。
<code>public final int kJavaJobWarning = 1</code>	警告メッセージを格納します。
<code>public final int kJavaJobError = 2</code>	エラー・メッセージを格納します。

次の表に、このインタフェースで宣言されるすべてのメソッドの説明を示します。

メソッド	説明
<code>int jobID()</code>	iBot に関連付けられているジョブ ID を返します。
<code>int instanceID()</code>	iBot に関連付けられているインスタンス ID を返します。
<code>int parameterCount()</code>	iBot に関連付けられているパラメータ数を返します。
<code>String parameter(int index)</code>	iBot の索引付けされたパラメータを返します (1)。
<code>boolean hasResultSet()</code>	この iBot に結果セットがあるかどうかを示します。
<code>File getResultSetFile()</code>	この iBot の結果セットのファイルを返します (2)。
<code>String userID()</code>	iBot を実行しているユーザーを返します。
<code>int getExitCode()</code>	iBot の終了コードを返します。
<code>void setExitCode(int exitCode)</code>	iBot の終了コードを設定できます。
<code>int getStatus()</code>	iBot のステータス・コードを返します。
<code>void setStatus(int status)</code>	iBot にステータス・コードを設定できます。
<code>String getMessage()</code>	iBot に関連付けられているメッセージを返します。
<code>void setMessage(String message)</code>	iBot に関連付けるメッセージを設定できます。既存のメッセージは置換されます。
<code>void appendMessage(String message)</code>	iBot にメッセージを追加できます。

SchedulerJobException クラス

次に、SchedulerJobException のクラスを示します。

```
package com.siebel.analytics.scheduler.javaostrpcalls;
public final class SchedulerJobException extends Exception {
    public SchedulerJobException(int exitCode, int status, String message) {
        m_exitCode = exitCode;
        m_status = status;
        m_message = message;
    }
    public int getExitCode() {
        return m_exitCode;
    }
    public int getStatus() {
        return m_status;
    }
    public String getMessage() {
        return m_message;
    }
    private int m_exitCode;
    private int m_status;
    private String m_message;
}
```

SchedulerJavaExtension インタフェースの `run` メソッドは、SchedulerJobException をスローするように定義されています。このクラスは、エラー状態のラッパーです。次の表に、3つのメンバーを説明します。

メンバー	説明
int m_exitCode	フレームワークにより、この終了コードが iBot に割り当てられます。
int m_status	フレームワークにより、このステータス・コードが iBot に割り当てられます。
String m_message	フレームワークにより、このメッセージが iBot に割り当てられます。

Oracle BI Scheduler の Java 拡張例

次の例では、これまでに説明したインタフェースとクラスを使用してカスタム実装を作成する方法について説明します。

注意：このコンパイル済クラスが iBot の一部として実行されると、iBot を実行したユーザー、iBot のジョブ ID、インスタンス ID、および使用可能なすべてのパラメータが出力ファイルに収集されます。

```
package sample;

import java.io.*;
import java.lang.Thread;

import com.siebel.analytics.scheduler.javahostrpcalls.SchedulerJavaExtension;
import com.siebel.analytics.scheduler.javahostrpcalls.SchedulerJobException;
import com.siebel.analytics.scheduler.javahostrpcalls.SchedulerJobInfo;

/**
 *
 * @author
 */
public class SimpleTest implements SchedulerJavaExtension
{
    public void run(SchedulerJobInfo jobInfo) throws SchedulerJobException
    {
        System.out.println("JobID is:" + jobInfo.jobID());
        System.out.println("Instance ID is:" + jobInfo.instanceID());

        System.out.println("JobInfo to string is:" + jobInfo.toString());
        try
        {
            File outputFile = new File("D:¥¥temp¥¥JavaJob.txt");
            FileWriter out = new FileWriter(outputFile);
            out.write("User ID:¥t¥t" + jobInfo.userID() + "¥r¥n");
            out.write("Job ID:¥t¥t" + jobInfo.jobID() + "¥r¥n");
            out.write("Instance ID:¥t¥t" + jobInfo.instanceID() + "¥r¥n");
            out.write("Parameter Count:¥t¥t" + jobInfo.parameterCount() + "¥r¥n");
            for(int i = 0; i < jobInfo.parameterCount(); ++i)
            {
                out.write("¥tParameter ");
                out.write(new Integer(i).toString());
                out.write(":¥t" + jobInfo.parameter(i) + "¥r¥n");
            }
            out.close();
        }
        catch(Exception ex)
        {
            throw new SchedulerJobException(1, 1, ex.getMessage());
        }
    }
    public void cancel()
    {
    }
}
}
```


索引

A

「Administrator Name」構成フィールド 21
「Administrator Password」 / 「Confirm Password」構成フィールド 21

B

「Bulk Fetch Buffer Size (bytes)」構成フィールド 20
Business Intelligence Scheduler
概要 10
サポートされるデータベース 11

C

「CA Certificate Directory」構成フィールド 22, 24
「CA Certificate File」構成フィールド 22, 24
「Call Interface」構成フィールド 19
「Cluster Monitor Port」構成フィールド 22

D

「Data Source Name」構成フィールド 19
「Database Type」構成フィールド 19
DayOfWeekEnum の値 52
「Default Script Path」構成フィールド 20

E

ExitCode スクリプト・オブジェクト・プロパティ 50

I

iBot

Job Manager の構成フィールド 25
「Keep Error Log Files」構成フィールド 26
「Log Directory」構成フィールド 25
「Max Rows Times Columns」構成フィールド 26
「Maximum Delivery Sleep Seconds」構成フィールド 26
「Maximum Global Sleep Seconds」構成フィールド 25
「Maximum Request Sleep Seconds」構成フィールド 26
「Minimum Delivery Sleep Seconds」構成フィールド 26
「Minimum Global Sleep Seconds」構成フィールド

ド 25

「Minimum Request Sleep Seconds」構成フィールド 26
「Number of Delivery Tries」構成フィールド 26
「Number of Global Tries」構成フィールド 25
「Number of Request Tries」構成フィールド 26
Oracle BI Scheduler、役割 10
「Purge files older than (days)」構成フィールド 25
「Web Server Machine Name」構成フィールド 25

再実行 38
ジョブ、追加と変更 35
スリープ時間 25
接続試行回数 25
定義 10
デフォルト値、リストア 25
配信試行回数 26
プロパティ・フィールド 37
変更 37
ログ・ファイルの場所 25

InstanceID スクリプト・オブジェクト・プロパティ 49

J

Java ジョブ

概要 67
例 73

Job Manager

「File」メニューのオプション、表 15
iBot ジョブ、追加と変更 35
「Instances」メニューのオプション、表 16
「Jobs」メニューのオプション、表 16
「Service Management」メニューのオプション、表 15

概要 36
ジョブ・インスタンス、管理 38
停止 15

「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックス 27

「iBots」タブのフィールド 25
「Java Extension」タブのフィールド 27
「Scheduler」タブのフィールド 19
アクセス 18
開く 15
役割 18

JobID スクリプト・オブジェクト・プロパティ 49

M

「Mail」タブ

- 「Authenticate against SMTP Server」構成フィールド 24
- 「From Display Name」構成フィールド 23
- 「Maximum Recipients」フィールド 23
- 「Number of Retries Upon Failure」構成フィールド 23
- 「Password」構成フィールド 24
- 「Sender Address」構成フィールド 23
- 「SMTP Port」構成フィールド 23
- 「SMTP Server」構成フィールド 23
- 「Use Bcc Instead of To」フィールド 24
- 「Username」構成フィールド 24

「Mail」の「Advanced」構成タブ 24

「Mail」の「General」構成タブ 23

「Maximum Connections」構成フィールド 19

「Maximum Execution Threads」構成フィールド 21

Message スクリプト・オブジェクト・プロパティ 50

「Minimum Execution Threads」構成フィールド 21

「Monthly by Date」トリガー・タイプ 33

「Monthly by DOW」トリガー・タイプ 34

N

nqJobDeleteScriptWhenDone スクリプト定義定数 53

nqJobDeleteWhenDone スクリプト定義定数 53

nqJobDisabled スクリプト定義定数 53

nqJobExecuteWhenMissed スクリプト定義定数 53

nqJobHasEndDate スクリプト定義定数 53

nqJobNoFlags 53

nqJobScriptContainsPath スクリプト定義定数 53

nqJobStartNow スクリプト定義定数 53

NQScheduler.log ファイル 12

O

Oracle BI Delivers

Java ジョブ・プロパティ 68

Oracle BI Scheduler

Java ジョブ・プロパティ 68

役割 10

P

ParameterCount スクリプト・オブジェクト・プロパティ 49

「Participant in Cluster」構成フィールド 22

「Password」 / 「Confirm Password」構成フィールド 19

「Pause When Service Starts」構成フィールド 21

「Purge DB every X minutes」構成フィールド 21

「Purge Old instances after X days」構成フィールド 20

S

S_NQ_ERR_MSG 12

S_NQ_INSTANCE 12

S_NQ_JOB 12

S_NQ_JOB_PARAM 12

Scheduler

Job Manager、役割 36

Scheduler のテーブル、データベースのサポートについて 11

一時停止と続行 15

実行スレッド 21

ジョブのスケジュールと削除 16

スキーマ・テーブル 12

スキーマ・テーブル、構成 20

接続、開閉 15

停止 15

「Scheduler Script Path」構成フィールド 20

「Scheduler」の「Advanced」構成タブ 22

「Scheduler」の「Database」構成タブ 19

「Scheduler」の「General」構成タブ 20

Scheduler の一時停止と続行 15

Scheduler の構成

「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックス、開く 15

「Scheduler」タブのオプション 19

構成オプション 18

Scheduler の停止 15

Scheduler のテーブル

概要 12

Scheduler のログ・ファイル 12

「Script Server Port」構成フィールド 22

「Server Port Number」構成フィールド 20

Severity スクリプト・オブジェクト・プロパティ 50

「SSL Certificate File Path」構成フィールド 22

「SSL Certificate Private Key File」構成フィールド 22

「SSL Certificate Verification Depth」構成フィールド 22, 24

「SSL Cipher List」構成フィールド 22, 24

「SSL File Containing Passphrase」構成フィールド 22

「SSL Require Client Certificate」構成フィールド

ド 22
「SSL Trusted Peer DNs」構成フィールド 22

T

「Temporary File Path」構成フィールド 20
「Timeout (Minutes)」構成フィールド 19

U

「Use Secure Socket Layer」構成フィールド 22, 24
「User name」構成フィールド 19
UserID スクリプト・オブジェクト・プロパティ 49

W

Windows

Scheduler、データベースのサポートについて 11
Scheduler のテーブル、概要 12

「Workflow」タブ

ユーザー名 27
ログオン・ユーザー名、バックエンド・データベース 27

「Workflow」タブのフィールド 27

あ

アプリケーション 10

一時ファイル、場所 20

インスタンス

ExitCode プロパティ 18
InstanceID プロパティ 17
JobID プロパティ 17
Message プロパティ 18
Status プロパティ 17
消去 16
ジョブ・インスタンス、管理 38
定義 38
取消し 16
表示 16

インスタンスの ExitCode プロパティ 18

インスタンスの InstanceID プロパティ 17

インスタンスの JobID プロパティ 17

インスタンスの Message プロパティ 18

インスタンスの Status プロパティ 17

インスタンスの消去 16

インスタンスの取消し 16

インスタンスの表示 16

インタフェース、Java

SchedulerJavaExtension 70
SchedulerJobInfo 70

オブジェクトの CreateArray メソッド 56

オブジェクトの DeregisterCancelCommand メソッド 57

オブジェクトの GetConfigurationValue メソッド 57

オブジェクトの GetTempFileName メソッド 58

オブジェクトの LaunchProcess メソッド 58

オブジェクトの OnError イベント 65

オブジェクトの RegisterCancelCommand メソッド 59

オブジェクトの ScheduleJobDaily メソッド 59

オブジェクトの ScheduleJobMonthlyDate メソッド 60

オブジェクトの ScheduleJobMonthlyDOW メソッド 61

オブジェクトの ScheduleJobNow メソッド 63

オブジェクトの ScheduleJobOnce メソッド 63

オブジェクトの ScheduleJobWeekly メソッド 64

か

拡張、Java

概要 67

例 73

クラス、Java

SchedulerJobException 72

さ

遅次のトリガー・タイプ 33

実行中のジョブ、定義 17

ジョブ

「Delete Job When Done」フィールド 29

「Execute When Missed」フィールド 29

「Last Run Time」フィールド 29

「Last Run Time」フィールドと「Next Run Time」フィールド 29

「Maximum Run Time MS」フィールド 29

「Running Instance Count」フィールド 29

再実行 38

実行後に自動削除 29

実行中のインスタンスの数 29

ジョブの追加または変更 36

ジョブのプロパティ構成フィールド 28

スケジュールと取消し 16

設定について 14

タイムアウト設定 29

ジョブ・インスタンス、管理 38

ジョブ・インスタンスの管理 38

ジョブ・スクリプト

Delete Script When Job is Removed 29

「Disabled」フィールド 29

検索 12

ジョブの終了時に削除 29

スクリプト・オブジェクト 43

スクリプト・オブジェクトの読取り / 書込みプロパティ 50

スクリプト・オブジェクトの読取り専用プロパ

- ティ 49
- スクリプト定義定数 51
- 月の定数 53
- 定義 43
- 発生回数の定数 54
- 日付フラグ 52
- 無効化 29
- 曜日フラグ 52
- ジョブ・スクリプト・パス** 20
- ジョブ・トリガー**
 - 設定 31
 - 単発トリガー 31
 - 反復トリガーのタイプ 33
 - 反復トリガーのフィールド 31
- ジョブ・トリガー、定義** 31
- ジョブのアクション**
 - 「Script Contains File Name」フィールド 30
 - 「Script Type」フィールド 30
 - 「Script」フィールド 30
 - (スクリプトの)「Parameters」フィールド 30
- ジョブのアクション、定義** 30
- ジョブのパラメータ、説明** 14
- スクリプト**
 - オブジェクトのメソッド 55
- スクリプト・オブジェクト**
 - 概要 43, 67
 - 読取り / 書込みプロパティ 50
 - 読取り専用プロパティ 49
- スクリプト・ジョブ**
 - 定義 10
- スクリプト定義定数**
 - JobFlagsEnum 53
 - 概要 51
 - 重大度 51
 - ジョブ・ステータス・フラグ 53
 - 月 53
 - 発生回数フラグ 54
 - 日付 52
 - 日付フラグ 52
 - 曜日 52
 - 曜日の定数 52

た

- 単発トリガー** 31
- 月の定数** 53

データベース、バックエンド

- Scheduler の要件 11
- 構成オプション 19
- コール・インタフェースのタイプ 19
- 最大同時接続フィールド 19
- 消去 20
- ジョブ・スクリプト・パス 20
- タイムアウトの指定 19
- データソースのログオン名 19
- データベース・タイプ 19
- デフォルトの構成オプション、リストア 37
- バルク・フェッチのバッファ・サイズ 20
- パスワード・フィールド 19
- ログオン・ユーザー名 19, 27
- 同時接続、最大数** 19

な

- 日次のトリガー・タイプ** 33

は

- 発生回数の定数、値の表** 54
- 反復トリガー**
 - Begin Date 32
 - End Date 32
 - End Time 32
 - Has End Date 32
 - Interval in Minutes 32
 - Maximum Concurrent Instances 32
 - Set Start Time To Now 32
 - Start Time 32
 - 関連するフィールド 31
 - トリガー・タイプ 33

ま

- メソッド、Java**
 - 実行と取消し 70

や

- ユーザー名** 19

ら

- ログオン・ユーザー名、バックエンド・データベース** 19